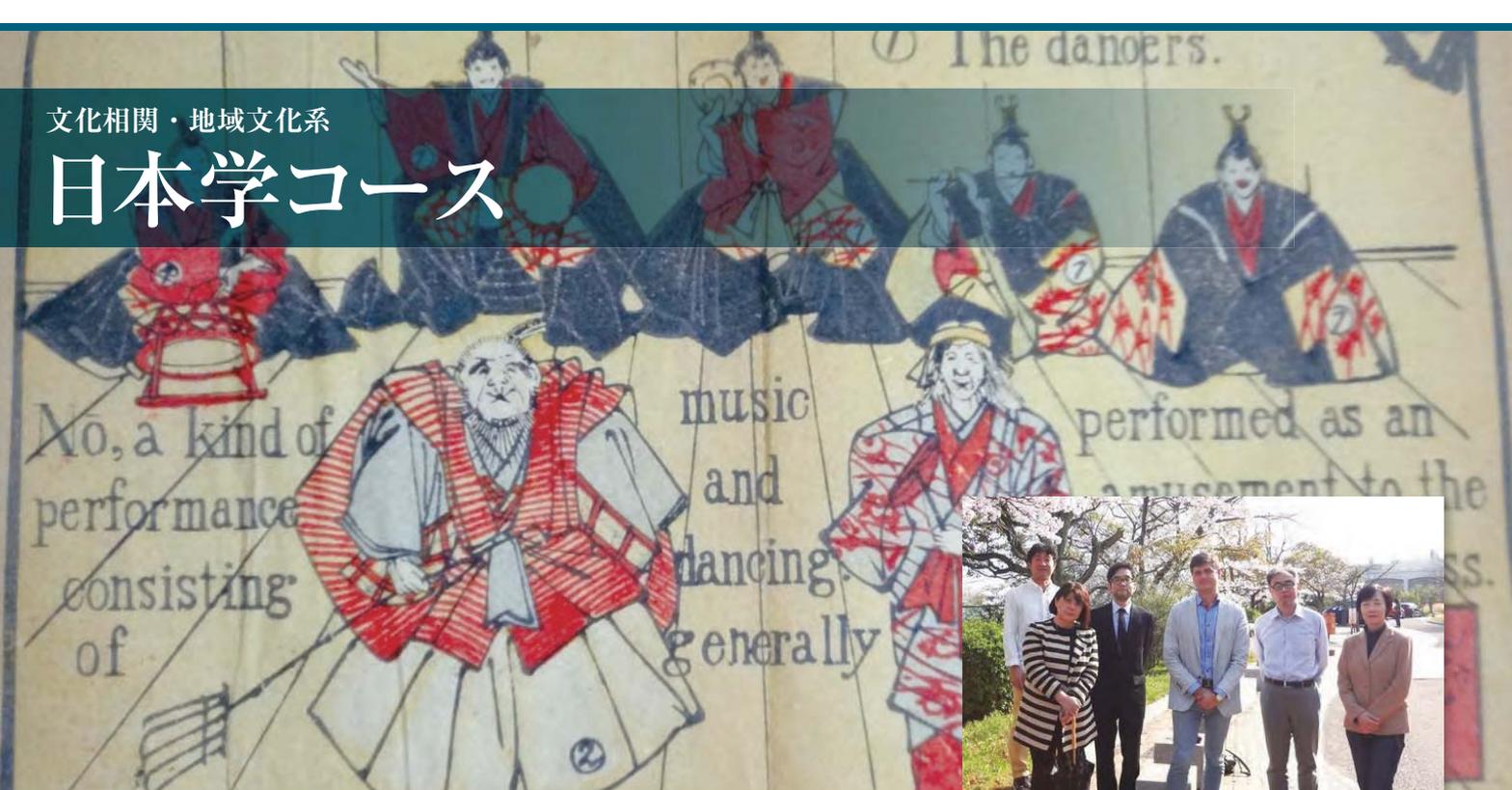


日本学コース



日本学コースでは、世界の多様な文化の中で日本文化を相対化しつつ、日本という地域における人間の営みを、文化の面から明らかにします。文学・芸術・宗教・思想などの文化や社会に関する古代から現代にいたるきわめて広範囲の諸問題に取り組み、共に研究し学んでいこうと考えています。

日本の文化や社会を深く理解するためには、古文書解読や資料調査を求められることも多いのですが、そのための専門的な能力を高める機会も提供しています。通俗的な日本論に惑わされることなく、高度の専門的技量と学問的能力をもって日本の文化や社会を論じられる人材を育てることを目指しています。

進路実績 (前期課程) 関西学院大学職員、船井電機、アップオン、NEXCO中日本、コウキ商事、兵庫県立高校教諭、初芝学園中学・高校教諭ほか。
(後期課程) 学芸員(芸北民俗芸能保存伝承館、高知県立歴史民俗資料館、茶道資料館、平和祈念展示資料館)、兵庫県庁職員、高校教諭(群馬県立高校、私立灘中学・高校教員)、神戸大学百年史資料室、上海外国語大学日本文化経済学院准教授、関西学院大学言語教育センター朝鮮語講師、大学非常勤講師(立命館大学、京都精華大学ほか)、吉林大学外国語学部日本語学科講師、国立公文書館、など。

在籍学生数 (前期課程) 4名
(後期課程) 4名

論文テーマ例 (前期課程) 「職員会議の変化と1980年代」「神戸市の男女共同参画事業と少子化」「三島流兵法書にみる村上水軍の「軍楽」」「但馬城崎「温泉時縁起」の研究」「18世紀初頭の華道の思想」「今昔物語集」の楊貴妃説話の典拠をめぐって」「対外宣伝雑誌における日本芸能のイメージ」「靖国神社問題を再考する」「Made in Italy' in Contemporary Japan」「戦後日本の「純潔教育」」「三島由紀夫の思想」ほか。
(後期課程) 「『日本霊異記』の冥界説話から見る冥界観の変貌」「雛子田の演技の実践に関する民俗誌的研究」「ドキュメンタリー映画における音」「米軍占領下沖縄における文化政策とラジオ」「移動する領土をめぐる説話の諸相」「近世藩儒の研究」「戦前の映像文化(幻燈・玩具映画・小型映画)の受容とその歴史の変遷」ほか。
廣田吉崇さんの博論に基づく著書「近現代における茶の湯家元の研究」(慧文社、2013)は「林屋辰三郎芸能奨励賞」を受賞しました。

所属教員の紹介

板倉 史明 准教授 日本文化表象論特殊講義ほか

日本映画・映画学。映画学の方法論をベースにして、国際的かつ歴史的な視点から日本映画を研究しています。

長 志珠絵 教授 日本社会変容論特殊講義ほか

近現代日本の文化史、ジェンダー史。最近のテーマは戦争の記憶論、米軍占領下日本の文化研究。

辛島 理人 准教授 日本社会経済論特殊講義ほか

政治経済史・国際文化論。戦時戦後の日本アジア関係やアメリカ民間財団の日本での活動を、ポリティカルエコノミーや文化交流に注目して研究しています。

昆野 伸幸 准教授 日本語文化論特殊講義ほか

日本思想史。1920年代から40年代にかけてのナショナリズムについて、歴史意識や宗教といった視点から研究しています。

シュラトフ・ヤロスラフ 准教授 日本・ロシア交流論特殊講義ほか

歴史・政治学。近現代における日露関係。日本とロシアの対外政策、中央と地方のアクターと政策決定過程に重点を置きつつ、19世紀後半～20世紀前半における東アジアの国際関係史を研究しています。

寺内 直子 教授 日本芸能文化論特殊講義ほか

日本伝統音楽・芸能論・民族音楽学。身体を用いて表現する音や芸能などに注目し、日本列島の文化を、アジアや世界の様々な文化との関連の中で動的にとらえます。

所属学生からのメッセージ

アルドリ・A・ドラジャトさん

(博士前期課程 2年)

インドネシア大学人文学部日本学卒業。

研究テーマ：インドネシアにおける日本の Text Reproduction の意味生成について



グローバル化時代において、日本は経済と政治に留まらず、文化的な国際関係を築いています。特に、日本が国家ブランディングのために「クール・ジャパン」計画等で築いた現在のアイデンティティである「ジャパン」は世界中に広まり、特にポピュラー文化の循環の経路となったアジア諸国では、日本の固定的なイメージが築かれました。私は、アジアの国々に受容された「ジャパン」のイメージは、日本が構築したものとは異なるのか、それとも対象の国の文化や社会政治的な原因によって全く新しい、またはハイブリッドなものになっているのかという点に着目し、アジア諸国の中でも特にインドネシアにおける日本のText Reproductionを考察して、研究を進めていきます。修士論文の研究対象は日本のテレビドラマの「バクリ」作品であるインドネシアのテレビドラマです。話の筋は原作と全く同じでありながらも、「バクリ」作品に宿った価値観とコミュニティの表象は原作と異なります。現段階では、インドネシアの「バクリ」作品には、クリスチャンのコミュニティがインドネシアにおけるメディアのイスラム化に対応するという意味生成があるとわかりました。このような発見から、日本のText Reproductionは単なる日本が構築した「ジャパン」の再現ではなく、現地での対応や順応の道具としても利用されるのではないかと考えています。

国際文化学研究所の先生方は学問に熱心で、指導教官と自分のコースだけではなく、他のコースの先生方も私の研究を多面的な視点で見てくださるので、自分の研究の普遍性も得やすいと思います。また、現在の日本研究は、日本だけで完結することができないため、国外の日本研究者たちと交流することで、対話を行う機会が増えています。この一年間に私は研究室の友人たちと複数の国際学会、例えばJapanese Studies Association in ASEANのシンポジウムや日韓次世代フォーラム等に参加しており、様々な国の日本研究者と研究の話をすることができ、ものすごく楽しく充実した研究生活を送っています。

修了学生からのメッセージ

小林 彩夏さん

(2019年度博士前期課程修了)

神戸女学院大学文学部卒業。

研究テーマ：三島由紀夫の思想——古典観と天皇観を中心に



近年、メディアなどで天皇や皇族が目まぐるしく増え、天皇制という問題が私たちにとって非常に身近な存在になってきました。近代の天皇制は、戦後に天皇の神格化否定いわゆる「人間宣言」が行われたことで、それまでの「現人神」から「象徴」としての存在へ変遷を遂げてきました。そのような激動の時代を生きた作家である三島由紀夫は、時代の変化とともに自らの政治的な思想、殊に天皇制についての考えを強く主張しました。こうした天皇制とひとりの作家の思想との関係について考えることが私の研究テーマです。修士論文では、歴史学と文学の視点を取り入れ、これまであまり追及されてこなかったメディアの史料を中心に彼の思想を繙くことを目指しました。

大学院では、日々の講義や演習を通じて専門性を高めることが可能です。多くの授業は少人数で行われ、時には活発な議論が交わされることもあります。特に日本学はコース発表の機会も多く、様々な領域を専門とする先生方から多面的なアドバイスを得やすい環境にあり、整ったサポート体制のもとで自らの研究テーマを深められます。

院生研究室では、年齢も出身も専門も異なる仲間との交流から知見が広がることもあり、刺激的で充実した研究生活を送ることができました。

松元 実環さん

(博士後期課程 1年)

神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。

研究テーマ：戦後日本の「性」教育



わたしは、戦後日本の性教育である「純潔教育」について研究をしています。敗戦とそれに伴う占領によって様々な新しい制度が作られる中で、特に子どもや若年層の性的逸脱を問題視して開始されたのが純潔教育です。その内容は現在の性教育の基礎となりつつも、より幅広く、時には実践的な側面を持つのが特徴です。

純潔教育に関する研究は、現在の性教育への関心を発端とするものが多く、加えて女性の人権問題への関心に基づくものが多く見られます。そこで、わたしは男性を対象にすることで、純潔教育をより体系的に捉えることを目指しています。具体的には、当時の教科書や教育雑誌などを集めたり、実際に純潔教育に関わっていた方にインタビューしたりすることで、これまであまり注目されてこなかった観点から研究対象を捉え直す試みを行っています。

大学院では、さまざまな専門分野の先生方の授業を受けることができます。さらに、日本学はコース発表の機会も多く、領域を渡って多面的なアドバイスを受けられるなどの充実したサポート体制が魅力です。また、そこで学ぶ学生の研究対象もさまざまであるため、自らの視野を広げながら専門性を高めていくことができる環境で、充実した研究生生活を過ごすことができている。

福島 可奈子さん

(2019年度博士後期課程修了)

ブリュッセル自由大学哲学・文学研究所修士課程修了。

2018-2019年度日本学術振興会特別研究員DC2。

研究テーマ：戦前日本の映像文化史（幻燈・玩具映画・小型映画）

現在、武蔵野美術大学非常勤講師。



現在わたしたちが当然のごとく毎日見る「映像」は、人々がいつ発見し、文化としてどう育んできたのでしょうか。戦後にテレビなどの電子機器が流通するまで、映像とは暗闇のなかに映し出す光のイメージでした。私が専門とするのは、日本人が西洋から輸入された様々な映像機器（光学装置）と出会い、自家業籠中の物とする明治時代から戦前までの映像文化史です。そのなかでも博士後期課程では、プロフェッショナルによる映画作品ではなく、無名のアマチュアや子供が家庭や集會などで楽しんだ映像文化を、三時代の流行—明治期の幻燈、大正・昭和初期の玩具映画、昭和初期の小型映画—から掘り下げて研究しました。それにより従来の映画史研究では見過ごされてきた、日本の映像産業文化の多様性と技術的な連続性を明らかにしました。

私の研究では膨大な史料の精査が必要であったため、ときには研究過程で五里霧中になることもありましたが、しかし日本学コースでは、少人数制に加えてコース発表の機会が多く、毎回様々な研究領域の教授陣から具体的なアドバイスが得られたため、狭隘化しがちな視野を正しながら研究テーマを深めていくことが可能でした。また学年ごとに段階的な論文の提出が必須であったため目標を立てやすく、博士論文完成に向けて着実に執筆することができました。また在籍中に、神戸大学の協定校であるパリ・ディオ（第7）大学へ交換留学し、シネマテーク・フランスなど現地の博物館での調査や研修にも参加しました。日本とフランス、映像と他芸術との相関関係から、理論研究だけでなくとどまらない実践経験を積むことができたのも、国際文化学研究所・文化関連専攻・日本学コースならではの魅力だと思います。

博士号を取得した現在、私自身も学生を指導する立場です。これまでご指導下さった先生方のような確かな指導ができていたのか自問自答の日々ですが、博士後期課程で学んだ理論と実践が、現在の研究生生活の何より大切な基礎になっていることは間違いありません。

Q&A

文学研究科の教育・研究内容との違いは何ですか？

国際的な視野から教育・研究を行っています。また、文学研究科では扱われることの少ない学際的、横断的研究分野や研究テーマを積極的に取り上げています。

仕事をしながら教育課程を修了することができますか？

これまで在職中の院生に対しては、5、6時限目を開講するなどの対策を取ってまいりました。事前にコース教員と相談されることをお勧めします。なお、博士前期課程の学生の場合、長期履修制度を申請すれば、2年分の学費で最長4年まで修了年限を延ばせる場合があります。

アジア・太平洋文化論コース



現代のアジア・太平洋地域は、経済や国際交流等の面で激しい変動を経験しながら急速に発展しています。その意味では今まさに地球上でも最もホットな地域の一つであると言えるわけですが、それらの表面的な発展の流れを追うのみではこの地域の持つ特質は理解できません。東アジアにせよ、東南アジアや太平洋地域にせよ、各地域が古くから保持してきた複雑さや多様な多彩な伝統というものがあり、その伝統がグローバル化の波をかぶりつつ変容してきた結果が、現在の姿なのです。したがって、この地域の特質を深く理解しようと思えば、社会構造、宗教、歴史、経済状況等々の諸方面から掘り下げた専門的な研究が不可欠となります。本コースでは、それらの専門的な研究視点、研究方法を多様な教授陣が様々な専門領域の授業で伝授し、指導する体制を整えています。

就職実績 (前期課程) アジア・太平洋地域関連で活動している諸企業、諸団体等への就職が予想されます。最近の修了者の就職先例:八重洲出版、トランス・コスモス(株)。(後期課程) 日本での大学・短大・高専・各種研究所、企業などへの就職の他、留学生の場合には出身国での大学や企業における専門職への就職等も期待されます。最近の修了者の就職先例:中国・内蒙古大学専任講師。内蒙古師範大学専任講師。中国・北京外国語大学外国語学院専任講師。

在籍学生数 (前期課程) 7名
(後期課程) 10名

論文テーマ例

- バンコクの中間層をデモに駆り立てた要因の研究—PDRC及びUDDにおける末端支持者の政治意識—
- インドネシアにおける大学生の恋愛と性をめぐる葛藤
- 国際交流活動と進路選択—東南アジア青年の船を事例に—
- アイヌ文化の表象と実践—白老町における文化活動を事例として
- 初期日蒙関係の展開と日本イメージに関する歴史学的研究
- 明代(14-17世紀)の雲南麗江ナシ族・木氏土司
- 清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の輩出—ハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心にして—
- 清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究—帰化城トゥメド旗を中心に—(第12回アジア太平洋研究賞受賞博士論文)

所属教員の紹介

伊藤 友美 教授 東南アジア社会文化論特殊講義ほか
東南アジア地域研究、タイ研究、仏教と女性研究などの分野を主として研究しています。

王 柯 教授 中国社会文化論特殊講義ほか
近現代中国思想史、日中関係などの分野を主として研究しています。

窪田 幸子 教授 オセアニア社会文化論特殊講義ほか
オセアニア地域の文化人類学、先住民研究などの分野を主として研究しています。

貞好 康志 教授 東南アジア国家統合論特殊講義ほか
インドネシア現代史、華僑華人研究などの分野を主として研究しています。

萩原 守 教授 モンゴル社会文化論特殊講義ほか
東洋史学、特に清代から近現代におけるモンゴルと中国の歴史などの分野を主として研究しています。

谷川 真一 教授 中国社会経済論特殊講義ほか
現代中国の政治と社会、国際関係などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

団 陽子さん

(博士後期課程 3年)

ペンシルベニア大学文学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。日本学術振興会特別研究員 (DC2、2017年-2019年)、メリーランド大学カレッジパーク校訪問研究員 (2018年-2019年)。
研究テーマ: 「中華民国の対日賠償要求問題: 米国の日本占領をめぐる米ソ対立を中心に」

近隣アジア諸国と日本との間でしばしば政治的な火種となる歴史問題。その問題にもかわる第二次世界大戦の日本の戦後補償について、対日戦争の戦勝国であり最大の被害国ともいえる中華民国の視点から研究をしています。一見、中国研究と思われがちですが、日本の戦後処理には多くの連合国がかかわっており、中華民国の文献を読むだけでは全体像が見えてきません。日本占領の主体であった米国の文献やその他諸国の動向などの歴史学的な調査が欠かせません。また、補償とは戦後世界の経済や安全にもかわる問題なので、さらに政治学的な視点も求められます。

アジア・太平洋文化論コースではアジアを中心とした様々な分野の先生方がおり、幅広い視点から指導を受けることができます。また、当コースが所属する文化相関・地域文化系では、日本学コース、ヨーロッパ・アメリカ文化論コースとの共同の指導体制が整っており、まさに学際的指導が実施されているといえます。お力添えにより、2018年には『中国研究月報』の学術研究賞を受賞することができました。

また、国際文化学研究所では、本学だけの研究にとらわれず、学外で研鑽を積むことにも力を注いでいます。私は、米国の大学に訪問研究員として滞在し、現地の公文書館や図書館にて文献調査を行いました。また、現地のセミナーに参加し、学会報告を行うなど、自身の研究の幅を広げることもできました。当研究所では、学外での挑戦を支える教員・事務職員の方々のサポートが充実しているといえるでしょう。

そして、日々の研究の下支えとなるのは、やはり院生研究室で過ごす時間。当研究所には、日本人学生の他に、多くの留学生が在籍しています。研究室では、院生たちが互いに助け合い、多様性を尊重しながら日々研究に励んでいます。

当研究所、本コースの魅力は、このように充実した研究環境にあると思います。これから進学されるみなさんも、この環境を活かして実りある研究生活をお送りください。

矢野 涼子さん

(博士後期課程 3年)

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。
日本学術振興会特別研究員 (DC2、2020年一現在)。
研究テーマ: 「1899年~1936年サモアにおける政治の近代化に対する現地住民の反応」



「普段、ニュースや世界史にほとんど取り上げられないことのない小さな島にだって、人々の生活があり、現在にまで伝えられるべき過去があるはずだ。」こうした考えから、私は太平洋諸島の歴史学を学び始めました。現在、私は、太平洋諸島のサモアという地域を事例に、「近代的」な政府の設置過程で現地住民 (太平洋諸島民、欧米人、華僑、ハーフなど) がどんな主張や行動をしたのか、ということの研究をしています。

サモアやニュージーランドなどの公文書館で収集した史料を読み込み分析することが、私の研究の主な作業です。史料を読む時間は孤独な時間でもありますが、史料を通じて、通常では聞くことの出来ない過去の人々の「声」を拾うことが出来る魅力的な時間でもあります。こうして明らかになったことを学会や研究会で口頭発表したり、論文にしたりしているうちに、気が付くとあっという間に1年が過ぎていきます。

アジア・太平洋文化論コースには、地域研究や歴史学、文化人類学など様々な地域や分野を専門とする先生方がいらっしゃいます。また、一緒に学ぶ学生の研究テーマも多種多様です。さらに、本コースには日本人学生だけではなく多くの留学生もいます。太平洋諸島の歴史学という日本では馴染みの薄い分野の研究を進める上で、近接領域の学問分野からの助言や諸外国の研究状況などの情報を得やすい環境に魅力を感じ、私は本コースで研究することを選びました。

博士後期課程への進学を考慮されている方の中には、金銭的な不安を抱えておられる方もいるかもしれません。日本学術振興会が募集する特別研究員に採用されれば、生活費や研究費に充てることのできるお金が支給されます。私は、今年度から特別研究員 (DC2) として、金銭に不安を抱えることなく研究を進めることができています。困った時には、先生方や先輩に気軽に相談することができるのも本コースの魅力です。

修了学生からのメッセージ

ハスゴワ (ハス高娃) さん

(2016年度博士前期課程修了) 内蒙古大学外国語学部日本語専攻と長崎外国語大学国際コミュニケーション学科日本語専攻とをダブルディグリー制度によって両方卒業。現在、神戸大学国際文化学研究所博士後期課程に在籍中。
研究テーマ: 「清末期オールドス社会とキリスト教開連の教案」



私は中国・内モンゴル自治区出身のモンゴル人留学生です。義務教育でモンゴル民族史を学ぶ機会が少なかったため、モンゴルに関する研究分野に触れ合う機会を求めて大学院に進学しました。博士前期課程では博士後期課程への進学を目指して研究者養成プログラムを選択しました。修士論文では内モンゴルのオールドスという地域を事例にして、清代及び中華民国期のモンゴル社会に注目して勉強しました。前期課程の二年間、指導教員の下で専門知識を勉強しつつ、研究のモデルとなる講義を通じて幅広い専門知識を学ぶことができました。演習では学術論文・図書の講読や議論を行う訓練を受けました。また、コースの先生たちが全員集まって研究指導を行う「構想発表」や「中間発表」などを通じて、研究というものがいかなるものであるか分かってきて、私の研究に具体的な課題が欠けているという先生たちの指摘がよく理解できるようになりました。

博士後期課程では、キリスト教開連の事件である教案を切り口にして清末期のオールドス社会と教案の起こり方を研究しています。清末期の清朝領ではキリスト教の信仰・布教が再び許可されましたがオールドスを含む外藩蒙古はその対象外でした。かつ外藩蒙古における土地の売買や勝手な開墾が禁止されていました。このような背景の下で、カトリック教会である聖母聖心会の宣教師たちは土地を獲得して耕作していたのです。そこで私は清朝政府の対モンゴル統治政策の変動や対キリスト教政策の変動などを考察しながら、宣教師たちが初期段階から土地の借り入れができていた原因や、日清戦争後土地購入許可証が発行された問題、義和団事件の賠償金代わりに公的に土地が教会に売り与えられた問題などを研究しています。博士後期課程では幸いにも、三島海雲記念財団、富士ゼロックス株式会社・小林基金、笹川科学研究助成などによる研究上のご支援を賜り、2020年4月からは日本学術振興会の特別研究員DC2として研究できることになったため、着実に研究を進めていきたいと頑張っています。

李云 (リウン) さん

(2016年度博士前期課程修了)

内蒙古科学技術大学卒業。現在、東大阪にある村田精工株式会社勤務。
研究テーマ: 「1920-1930年代の内モンゴルにおける開墾反対運動~ホルチン左翼中旗、ガーダー・メイリンとヤンサンジャブの事例を中心に~」



私は、中国の内モンゴル自治区から来日したモンゴル人です。1年間の研究生時代を含めて、神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程に計3年間お世話になりました。この3年間は、私の人生の中で一番意義があり、一番楽しく、一番多くの知識を身につけることができた時期でした。指導教員萩原教授の下で、

この3年間、故郷内モンゴルのホルチン左翼中旗の土地開墾の歴史を研究することができ、また他のコースや他の専攻の先生方の授業も受けることができました。中国、内モンゴル、日本などの枠を超えて、アジア・太平洋地域から全世界にまで視野を広げ、歴史学、宗教学、文化人類学、政治学、言語学など、分野横断的な知識を身につけました。現在は、村田精工株式会社という自動化省力機器を製作しているメーカーに勤めております。現在の仕事は自分の研究と直接の関係はありませんが、仕事の関係で現在毎月、半分は中国へ出張していますので、国際文化学研究所で学んだ自分の知識などを生かして、日中の友好関係に少しでも力になれるよう、頑張りたいです。

Q&A

留学生や社会人入学の院生もいますか？

本コースでは日本人と留学生の両方がいつも多数在学しており、年度によっては、社会人入学・長期履修生の院生もいます。

ヨーロッパ・アメリカ文化論コース



ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは、近代以降、世界の政治・経済・文化などで中心的な役割を果たしてきたヨーロッパとアメリカの社会と文化について、多様な角度から総合的に教育・研究します。これらの地域で発展した文化は世界へと広まりましたが、現在、批判的に再検討されていることは周知の通りです。それに加えて、最近では、欧米の中にありながら近代成立の過程で周縁にあった社会と文化に関する研究も進展してきています。このコースでは、以上のような成果を踏まえて、現代の我々の生活と意識に深く根付いているように見える欧米的な思考や価値観を再検討し、その21世紀における意義を探っていきます。歴史・言語・宗教・思想・文学・芸術・社会制度など、幅広い分野にわたって具体的な考察を積み重ねることで、いまだ知られざるヨーロッパやアメリカの深奥に迫りたいと思います。

進路実績 (前期課程) 関西電力、時事通信社、在外公館派遣調査員、東洋電機製造、大成建設、ニトリ、浜松市役所、クボタ、東洋学園教諭、富永貿易、中国航空工業集団、神戸大学大学院後期課程進学、明星産商、他
(後期課程) 神戸大学非常勤講師、神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、大和大学非常勤講師、同志社大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、神戸大学大学院国際文化学研究所異文化研究交流センター (IRec) 協力研究員

在籍学生数 (前期課程) 10名
(後期課程) 1名

論文テーマ例 グリム兄弟『ドイツ伝説集』、ウィリアム・モリス研究、『ハリー・ポッター』に見るヴィクトリア文化の受容、現代フランスのファッション、チェコロマ文学・バロック研究、アメリカイタリヤ移民、ブロンテの自然観、I Love Lucyにおける視覚的ギャグの分析、ポルトガルにおけるミランダ語の成立、戦間期アメリカ合衆国における平和主義、孤立主義、ポピュリズム、英国庭園研究、近代におけるバルカン半島のナショナリズムの形成過程に関する一考察、日露の皇室外交とメディア、ベラルーシ化の急速な進展、イーヴリン・ウォーの「ブライス、ヘッド再訪」、アメリカの移民政策と中国系移民の現状、他

所属教員の紹介

青島 陽子 准教授 スラヴ社会文化論特殊講義ほか

ロシア・東欧の近代史を専門としています。とくに、前近代に多民族・多宗教が共存した当地域において、社会の近代化に付随して、ナショナリズムや「民族」の衝突がどう生じたのかに関心をもっています。

井上 弘貴 准教授 アメリカ多民族社会形成論特殊講義ほか

政治学をベースにしながら、19世紀末から20世紀のアメリカ合衆国における知識人たちやデモクラシーの歴史を中心に、アメリカ研究をしています。

小澤 卓也 教授 ラテン・アメリカ文化交流論特殊講義ほか

ラテンアメリカ、とりわけ中央アメリカの近現代史が専門です。最近ではグローバルな歴史的視点に立ちながら、中米社会を大きく規定している民族問題や輸出作物生産文化の研究を進めています。

坂本 千代 教授 フランス文化表象論特殊講義ほか

専門はフランス文化学、特にフランスの女性作家とその作品に興味があります。19世紀の女性作家ゾルジュ・サンドやマリー・ダグー、ロマン主義、ジャンヌ・ダルク等について研究しています。授業ではもっと幅広く、ヨーロッパの女性の歴史や表象の問題を取り上げたいと考えています。

西谷 拓哉 教授 アメリカ言語映像文化論特殊講義ほか

文学と映画を中心として、アメリカ合衆国の多様な文化状況や表現の独自性などについて研究しています。専門は19世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学ですが、小説の映画化という観点から両者のナラティブとしての特徴を比較することにも関心を持っています。

野谷 啓二 教授 イギリス宗教文化論特殊講義ほか

イギリスとアメリカの文化・文学とキリスト教の関係について研究しています。宗教が文化の形成にどのように関わっているか、個人と文化のアイデンティティ構成要素としての宗教に関心があります。

所属学生からのメッセージ



大塚 真理子さん

(博士前期課程3年)

法政大学文学部地理学科卒業。

研究テーマ：「在日経歴ペルー人青年がペルー社会へもたらす影響」

外国人児童生徒の学校での学習・生活支援に携わり十年が過ぎた頃から、関わったペルーの子ども達、先生、そして自分に私は何を残せるのかと自問していました。その手がかりを得るべく、本研究科ヨーロッパ・アメリカ文化論コースに入学し早一年が過ぎました。所属コースをはじめ多方面の専門家の先生方から意見をうかがえたこと、研究内容も年齢や国籍も違う院生仲間と交流できたこと、ペルーでのインタビュー調査を通じて皆さんのペルーの方々と知り合えたこと、これらは今後の私の人生の支えとなることでしょう。現在、自問への回答に向けての第一歩として、在留資格の条件の中、自国と日本を行き来するペルー人についてキーワードをたて整理し、修士レポートで取り組む内容の絞り込みをしています。時に苦しいこともある大学院での研究生活ですが、仕事から研究項目を探り、研究項目から仕事内容を見る習慣が身につく日々を実感しています。

姚 程琳さん

(博士課程前期2年)

研究テーマ：「アメリカにおける伝統的家庭の価値観と同性婚問題の関係」



政治、経済、思想などの分野で多角的に世界をリードしてきたアメリカの文化や歴史に興味があり、日本の大学院で高度な研究をしたいと思い、国際文化学研究所のヨーロッパ・アメリカ文化論コースに入学しました。

このコースには、宗教、政治、思想などの多様な講義や演習のもと、指導を受ける体制が整っています。様々な専門分野を持つ先生方から親切に指導を受けることができ、多方面から知識や情報を得て、アメリカ全般の理解を深めることができます。また、日々の講義や演習以外でも、豊富な研究資料の読解をつうじて思考能力を磨きながら研究の専門性を高めていくことができます。

近年、ジェンダーの問題が目立ってきて、同性愛差別と同性婚はどこの国の社会においても頻繁に取り上げられる問題になっています。同性婚に対する考え方とアメリカ人が持つ家族の価値観とは密接な関係を持っています。歴史の条件や経済状況の変動により、家族の機能と意味が変化し、家庭生活に関わる結婚や親の位置づけの見直しが迫られています。こうしたアメリカの家族の変容とその原因を探求しつつ、21世紀のアメリカの家族のあり方や性別の役割分担を再検討することを通じて、同性婚について研究を行っています。

院生研究室では他のコースの学生との多国籍の交流ができるのも大変魅力を感じています。充実した毎日を楽しみながら、専門の研究と多彩な学生生活を通じて新しい世界と出会え、自分の視野を広げることができています。

修了学生からのメッセージ

梶ヶ山 薫さん

(2019年度博士前期課程修了)

研究テーマ：「映画『赤い薔薇ソースの伝説』(Como agua para chocolate)にみる母性表象」
現在、在ジャマイカ大使館専門調査員。

私は学部時代にラテンアメリカ地域とその映像の世界に魅了され、メキシコやキューバ映画の研究をしたいと考えていました。まだまだ日本では研究があまり進んでいない分野である一方で、私の研究を理解し、サポートをいただけたのが神戸大学国際文化学研究所でした。特にヨーロッパ・アメリカ文化論コースは、様々な国や地域が一つのコースにまとまり、一つの国では

完結しえない事柄を国境や地域を越え、多角的に研究ができることが最大の魅力であると思います。私にとっても映画からラテンアメリカ地域を研究するにあたり、米国やヨーロッパ地域との関係を理解することは必要不可欠な事でした。それらを当たり前に学び、様々な方々にサポートしていただける環境に身をかけたことは有意義なことだったと思います。また、在学中には研究のブラッシュアップのために在キューバの映画研究所での調査や、メキシコ国費留学プログラムの一つ「日墨戦略的パートナーシップ研修計画」に参加し、約一年間のメキシコ留学を実現することができました。

私は現在、在ジャマイカ大使館の専門調査員として、日本とジャマイカ、ペルー、パハマとのより一層持続可能な関係性を構築すべく、文化交流事業の開催や現地調査を行っています。このヨーロッパ・アメリカ文化論コースで学び、ご指導いただいた多くの事が糧になっていることを日々実感しています。これから、入学を考えている皆さんにはぜひ、自分の興味から積極的に世界へ視野を広げてほしいと思います。

喜多 玲子さん

(2018年度博士前期課程修了)

研究テーマ：「日露の皇室外交とメディア～ロシアメディアにおける日本への眼」
現在、明星産商株式会社勤務。

学部生の時、「皇太子ニコライが日本を訪れた際の日本観」について研究をしていました。研究を進めて行く中で、皇室外交が日露の友好関係に果たす役割について関心が広がり本研究所に入学しました。ロシアの新聞・雑誌を分析し、ロシアメディアが日露の皇室外交をどのようにとらえたのか、そして日本や日本皇室への眼差しの変化を研究しました。

本研究所は歴史・宗教・思想など様々な分野を幅広く学ぶことができます。私は自分の研究テーマには直接は関係なくても興味がある講義には積極的に参加していました。ほとんどの講義が少人数で、様々なテーマについて発表を行い、その内容について先生や学生と議論する形式です。参加する学生は自分とは関心や研究テーマも異なるため、考えもなかった視点から質問をされることや幅広い分野のテーマの発表を聞くことがあります。その経験のなかで多くの刺激を受け、新たな視点から自分の研究を考察するきっかけになりました。ヨーロッパ・アメリカ文化論コースで学んだ2年間は自分の成長を感じられる充実した時間でした。

Q&A

社会人ですが、仕事をしながらの入学は可能でしょうか？

規定年限で修了を目指す場合、博士前期課程では少なくとも1年次においては週に1～2回以上の登校が必要ですが、「長期履修制度」を利用すれば最長4年まで修了年限を伸ばせますので、登校日と学期毎の履修単位をかなり少なくすることができます。また、博士後期課程の場合は、指導教員との相談により柔軟な受講が可能なお場合もあります。

外国語の知識はどの程度必要ですか？

英語の文献が読める程度の知識は必要です。どこかの地域に関することを専門的に研究する場合は、当該地域の言語（フランス語、ドイツ語、ロシア語、等々）の知識を持っている必要があります。前期（修士）課程の「キャリアアップ型プログラム」では、それほど高度な外国語力がなくても大丈夫でしょう。

専門の先生がいない地域や領域のことを研究テーマにすることはできますか？

教員は数が多く、また幅広い地域や領域をフォローしていますので、かなり柔軟に対応することができます。受験を考えている場合は、いずれかの教員と連絡を取って、具体的なテーマについて相談してください。

文化関連・異文化コミュニケーション系

文化人類学コース



本コースでは、多様なテーマと地域を研究対象にする文化人類学の専門スタッフが、充実した教育研究カリキュラムを提供しています。今日の文化の諸問題は、グローバル化に伴うさまざまな文化と価値観の対立、分裂、統合と融和、生成と消滅といったダイナミズムを特徴としています。本コースでは、地に足のついた研究調査（フィールドワーク）から世界を見渡す広くしなやかな視点をもつことで、深い異文化理解をもとに多様な文化が対話可能となるような方法をともに考えていきます。文化をめぐる複雑な問題に積極的にとり組み、国際的に活躍する専門家、研究者をめざす学生、文化人類学の高度な研究を志す留学生も歓迎します。

就職実績 (前期課程) 奈良県立大学(専任講師)、京都産業大学(助教)、多摩美術大学(助手)、広東貿易職業技術学校(講師)、中日新聞社、イオン、旭化成、東京三菱銀行、モバゲー、活水女子大学、韓国法務省、バンダイ、大阪府高校教員、青年海外協力隊(コスタリカ派遣)、アビームコンサルティング、東京国際貿易、三菱総研DCS、関西福祉科学大学、神戸松蔭女子学院大学(非常勤講師)、(株)富士ソフト
(後期課程) 神戸大学(准教授)、大阪観光大学(教授)、島根大学(准教授)、武蔵大学(准教授)、法政大学(准教授)、東京医科大学(専任講師)、外務省(専門調査員)、立命館大学衣笠総合研究機構(専門研究員)、帝塚山大学(非常勤講師)、浙江大學(専任講師)、大妻女子大学(専任講師)、滋賀大学(特任准教授)、立命館大学(准教授)、神戸大学(助教)

在籍学生数 (前期課程) 14名
(後期課程) 8名

論文テーマ例 (前期課程)
カーゴカルト、少数民族言語の標準語化、観光、民俗芸能の伝承、ポストコロナール、マルチカルチュラル・オリエンタリズム、中国の女性の地位、悪石島のボゼ、ローカル・ハワイアン、プリミティブ・アート、在日ペルー人、映像人類学、クラ交易、バングラデシュのフェアトレード、国民文化と教育、在日コリアン、国際結婚、在日ベトナム人、奄美出身者同郷団体、文化遺産、伝統の創造、多文化共生、朝鮮族、映像、アイデンティティ・ポリティクス、ポピュラー音楽の表象、ジャマイカのペンテコステ教会、在米カリビアン、カーニバル、在米コリアン・アイデンティティ、ラストファミリー運動、ジャマイカのエチオピア正統教会、キリスト教と文化の文脈化、日系アルゼンチン人、ドミニカ共和国野球移民、スポーツ移民とトランスナショナルリティ、在米華人、エスニック・コミュニティとメディア、マルティレイシャル、在日ブラジル人、移民の子弟教育、メキシコ女性と住民参加型開発、カナダ先住民、ディアスポラ・アイデンティティ、日系ハワイ人、帰米二世、ヒスパニック、カリフォルニア州バイリンガリズム、限界集落
(後期課程)
文化の真正性、ヴァヌアツ・アネイチュム、歴史人類学、難民、カレンニー、ホームステイ、在日ベトナム人、ケアと家族、朝鮮族村落変容、朝鮮族移民の女性化、華僑・華人、ベトナム観光、オーストラリア・アボリジニ、「問題飲酒」、先住民と非先住民、カリブ海地域、ジェンダー、男性性、ダンスホール文化、ダンスホール・ゴスペル、ポピュラー音楽、カリブ、ソカ、ナショナル・アイデンティティ、人種と民族ポリティクス、混血の表象、当事者性、「オモニ」—韓国社会における「母性」とケア、マイノリティ

所属教員の紹介

梅屋 潔 教授 民族学特殊講義ほか

社会人類学、東アフリカ民族誌、妖術・邪術研究、日本の民俗宗教、開発の人類学などの分野を主として研究しています。

岡田 浩樹 教授 民族誌論特殊講義ほか

朝鮮半島、日本を中心とした東アジア諸社会およびベトナム、植民地主義および近代化過程における家族、宗教の再編成、マイノリティと多文化主義、宇宙人類学などの分野を主として研究しています。

齋藤 剛 教授 文化人類学特殊講 義ほか

社会人類学、中東民族誌学、人類学的イスラーム研究、モロッコ、グローバル化と宗教・民族などの分野を主として研究しています。

新任教員〈2020年10月着任予定〉

新任教員〈2021年4月着任予定〉

所属学生からのメッセージ

新里 勇生さん

(博士前期課程 2年)
北海道大学文学部卒業。
研究テーマ:「日本の酒蔵の経済人類学的考察」



私は学部時代に、高校生の「応援団」をテーマに卒論を書きました。文化人類学の理論や視点とフィールドワークに基づく研究をバランスよく学べるという点に惹かれ本研究科に入学しました。

大学院入学後、文化人類学コースの先生方や先輩方のアドバイスもあり、自分自身の問題関心を今一度、徹底的に問い直し、経済人類学の視点に関心をもちました。経済人類学は、市場に限らず、人と人との間で行われるインフォーマルな交換や贈与、分配などの経済行為に注

目する分野です。修士課程では、経済人類学の視点から日本の酒蔵(さかぐら)に注目し、調査研究を進めようと思っています。

文化人類学コースは、さまざまなフィールドを専門とし、視点や理論的関心が異なる先生方がいらっしゃるの、さまざまなフィールドについて、多様な視点を学ぶことができます。人類学の古典的な理論から最新の議論までをフォローする授業、経験豊富な先生方によるフィールドワークの方法に関する授業、そして学術論文の問題設定や論理展開などを、少人数で懇切丁寧に指導してもらえる授業まで幅広く開講されています。

また、文化人類学コース以外の授業を取ること、他コースの学生が文化人類学コースの授業を受講することも可能で、他コースの学生との知的交流も活発です。さらに、こういった授業以外にも「合同ゼミ」という制度があり、コースの全員の先生方や学生が集い、学位論文に向けて準備中の研究報告や、学術雑誌へ投稿する草稿など対して相互にアドバイスや指導が行われます。

なによりも、研究を進める上で重要なのは、同じ大学院生がいることです。移民、モノ、先住民、宗教、手仕事、習俗、祭り、食文化など、多様なテーマに取り組む大学院生が20名以上います。それぞれが異なるテーマやフィールドに取り組んでおり、留学生も多いため、学生同士で雑談をしているときなどに、さりげない会話から、思わぬ研究のヒントを得ることもしばしばあります。

このように、文化人類学コースは、研究の基礎から始め、研究をしっかりと突き詰め、論文執筆するのに最適な環境が整っています。

荒木 真歩さん

(博士後期課程 2年)
神戸大学大学院博士前期課程修了。
研究テーマ:「民俗芸能の習得と伝承」



私は盆踊りや獅子舞といった民俗芸能の身体と音楽について研究をしています。調査ではフィールドワークと言って、私の場合だと民俗芸能の練習の場に何度も足を運び、演者たちがいかにかに歌、太鼓、そして踊りを習得して皆で揃って演じるまでに至るのか、人々のやりとりを詳細に観察します。一緒に練習に参加させてもらうこともあります。かれらにとっては当たり前の習得方法であっても、私にとっては驚きの連続で民俗芸能を習得する・伝えるとは何かを常に考えさせられます。

学部では芸術大学で音楽学を専攻していました。調査をすすめる中で芸能だけを見るのではなく、それをおこなう人々のやりとりや関係を人類学の観点から考えたく、博士前期課程から文化人類学コースに入りました。実は私だけではなく文化人類学コースの多くの院生は、学部は別の分野を専攻しており、大学院に入ってから文化人類学を学び始めています。またコース自体がそのような院生の背景を尊重し、現在の研究に積極的に活かすことが推奨されています。

そのためコースでは院生の中で読書会をひらき、人類学の古典から近年に重要になっているテーマの本まで幅広く読み学べる場を作っています。また年に数回、外部から人類学関連の研究者を招き、神戸人類学研究会を開催しています。授業の一環として、週に一度のゼミではコース全員の先生と博士前期・後期課程の院生が集まり、研究発表を行います。ゼミは発表の仕方、論文の書き方といった基本的なことはもちろん、指導教員以外からも多角度から内容に深く切り込んだコメントや質問が飛び交い、とても力の付く有意義な時間になっています。加えて本コースが刊行する査読つき学術誌「神戸文化人類学研究」への論文投稿や編集も行っています。

博士後期課程になると、博士論文執筆やその後も見据えたアドバイスをいただいたり、院生同士で研究上の情報共有をしたり、互いに研鑽を詰める良い環境となっています。

修了学生からのメッセージ



姜 小友莉さん

(2014年度博士前期課程修了)
大阪女学院大学国際・英語学部卒業
研究テーマは「自己主張としての国籍—in日コリアンを事例として」。
現在、ピーチ航空 CA

私は、在日コリアンを研究対象として「在日コリアンが 国籍を現在どのように認識しているか」、「過去の在日コリアン社会における国籍の認識とそれはどのように変化したか」ということを研究していました。1年目は必修科目の授業を受講しながら、指導教員のゼミで自分の研究テーマの発表を継続的に行っていました。そこでは毎回指摘を頂き、その指摘をもとに「なぜ」、「どのように」などと自問することによって自分のテーマが少しずつ形になっていきました。授業は少人数制で行われるため、先生や学生とも距離が近く、深い議論をすることができます。文化人類学コースの特徴として、先生方がそれぞれ別のフィールドに特化しており、アジアを中心とする世界各国から多様な背景をもった学生が集まっていることがあげられます。これまで自分がもたなかった視点からアドバイスを受ける事ができ、自分の研究テーマに関連することだけに限らず、幅広い知識を得ることができます。2年目以降は修士論文の執筆にみっちり時間を使いました。一つのテーマを多角的な視点からじっくりと考察した経験は、私の人生において大きな強みになったと感じています。

澤野 美智子さん

(2013年度博士後期課程修了)
神戸大学文学部人文学科卒、韓国ソウル大学校社会科学大学院人類学科修士課程修了。
博士論文タイトル:「(オモニ)を通して見る韓国の家族—乳がん患者の事例から」。
現在、立命館大学総合心理学部准教授

私の研究テーマは、韓国の家族です。特に、乳がん患者さんたちが病気に対処するなかで家族とどのような相互行為を行っているのか、ということに注目して博士論文を書きました。現在はさらに、代替療法的な食餌療法、ケア、ジェンダーなどの問題へと広げて研究を進めています。

博士課程では、研究者としての心構えから論理的な文章の書き方、博士論文のアドバイスにとどまらず、将来就職したとき学生を教えるためのスキルに至るまで、長期的な展望を見据えたご指導をいただきました。指導教員以外の先生方に教えるを請いに行くことも積極的に奨励される雰囲気ですので、ひとつの問題に対して様々な角度からご意見をいただくことができ、考えを深めることができました。

また、院生たちで行う研究会や読書会も、研究情報を交換したり学問的知見を深めたりするにとどまらず、研究上の悩みを共有したり互いにアドバイスをしあったりするうえで非常に有意義でした。志願者の皆さんも、このような恵まれた環境を活かし、充実した大学院生活を送ってください。

Q&A

学部では文化人類学を専攻していませんが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で文化人類学の専門コースにいる必要はありません。ただし、文化人類学についての基本的知識を身につけておくとい良いでしょう。最近では手頃な入門書、概説書がふえていますので、まずはそれらを参考にし、所属する大学の文化人類学関係の講義・演習を受講することをお勧めします。大切なことは、明確なテーマをもち、これを文化人類学の視点から考える姿勢です。

指導教員以外に研究上あるいは論文の指導を受けたり、論文テーマが変わって指導教員の変更をすることはできますか？

教員全員の共同指導体制をとっており、指導教員以外からも指導を受けることができます。また、研究テーマを変更する必要が生じた場合には、所定の手続きを経て指導教員をコース内で変更することも可能です。

比較文明・比較文化論コース



本コースでは文明・文化が地理や言語などの様々な境界を越える諸相について、主に科学技術文明と言語文化を考察の対象として、その発信・受信行為がもたらす変容のダイナミズムを歴史的に比較研究します。とりわけ、グローバリゼーションが進展する中で明らかになっている、文明・文化における優位と劣位という非対称性を念頭に、一方的な受容とされる現象の背後に抵抗、偏見、創造などの側面があることに注目し、その交流や変容における双方向性について、最新の研究を題材に理解を深めることを目指しています。

進路実績 長崎市職員(学芸員)、三菱東京UFJ銀行、パナソニック電工、ニシキ商会、ニトリ、GMOクラウド、兵庫県立大学客員教授他。

在籍学生数 (前期課程) 1名
(後期課程) 1名

論文テーマ例 科学技術の発展と安全・安心社会の相関、魯迅「故郷」と日本の国語教科書、日本における「聊斎志異」の翻訳と翻案—「竹青」を中心に、村上文学の越境—短編小説の日中対訳をめぐる、ラフカディオ・ハーン『骨董』と『北斎漫画』—挿絵という、もうひとつの文化表象を読む、生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流、西川如見の文献に見る宇宙観・自然観、そのほか、明治期来日外国人、古典テキストとイメージ、環境問題、科学史、科学社会論に関するものなど。

所属教員の紹介

北村 結花 准教授 伝統文化翻訳論特殊講義ほか

近代における日本古典文学の受容について『源氏物語』を中心に研究しています。古文をはじめ、さまざまな文献を丁寧に読むことを基本にしたいと思っています。

塚原 東吾 教授 科学技術社会論特殊講義ほか

科学史および科学技術社会論を研究しています。最近では地球環境問題、気候変動とアンソロポセン、それにバイオ資本主義の問題を検討しています。

遠田 勝 教授 日米文化交流論特殊講義ほか

明治時代の日米文化交流を中心とした、比較文学・比較文化の研究を専門にしています。ラフカディオ・ハーン、お雇い外国人、夏目漱石、井伏鱒二などについて論文を書いています。

修了学生からのメッセージ



小村 志保美さん

(2016年度博士前期課程修了)

研究テーマは「英語圏における英訳俳句の受容」

私は俳句の英訳について研究を深めたいと考え、本コースへの入学を決めました。日本語で詠まれた俳句が英訳され、それらがどのように解釈・受容されているのかについて研究しています。17音に凝縮された日本独特の文化や季節感を忠実に再現して英訳するのか、そもそも再現されるべきなのかなど興味はつきませんが、本コースの様々な講義を通して、翻訳のものだけを見るのではなく、その時代背景やそれぞれの文化の伝播過程を知ることの重要性に気づきました。また、オリジナルな資料を読み解くことや一つの疑問を深く掘り下げて考察することなど、研究に必要な力をつけることも指導していただきました。

このように、本コースの魅力は分野の境界を越えて学べるようカリキュラムが組まれていることです。翻訳の研究において文学的側面からだけでなく、科学文明や古代歴史などの側面からもアプローチすることができます。一見関わりがないように思われるこれらの分野が、「翻訳」というテーマを通して点が線となってつながることにより、私の研究に多角的な視点と深みを与えてくれています。

そして、昨年度より日本語教員養成サブコースが設置されたことにより、自分のテーマを研究しながら日本語教師への道が開けたことも魅力の一つになっています。



張 悦さん

(2016年度博士前期課程修了)

研究テーマは「武者小路実篤の新しき村が近現代中国のユートピア思想に与えた影響」

私は、異国情緒が溢れる神戸の町に来てからもうすぐ三年目になります。神戸大学大学院国際文化学研究所を志望したのは、静かな自然に囲まれ、便利な図書館システムを有することだけでなく、留学生も多国から集まっており、異文化への理解を深めようと考えている人には、最適の環境だと思ったからです。

特に、本コースでは、日米文化交流や古典文学翻訳からギリシャ文明まで、幅広い視点で文明・文化の変容現象を研究できる点が、大変魅力だと思います。私の研究テーマは明治末期に来日し、近現代日本文化・文学と深く関わっている中国人作家周作人と「新しき村」という理想的共同体の実現を目指した白樺派代表者である武者小路実篤との個人交際から、日中ユートピア活動の関係と比較です。

おかげさまで、私は今年度の4月からロータリー米山記念奨学会の奨学生になりました。今はよりよい研究環境の中で、研究成果を上げるために日々努力を重ねて、励んでいきたいと思っています。もし、あなたも、異文化理解を深めたい、文明・文化の越境やその中の具体的な人物と作品についての比較研究をしたいとしたら、私たちと一緒に異文化交流のタイムトラベルしませんか。



北村 沙緒里さん

(2012年度博士前期課程修了)

広島市立大学国際学部卒業。神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了。

研究テーマは「小泉八雲を中心とした明治期の来日外国人の比較文学研究」。

現在、長崎市職員（学芸員）。

私が大学院への進学を志望したきっかけは、学部時代の研究テーマをもっとしっかりと勉強したいという単純な理由からでした。私は本コースで、明治期の来日外国人の著作に見られる「日本」像についての比較研究がテーマでした。修了研究レポートでは、小泉八雲の文学作品を扱い、テキストと挿絵の表象について論じました。私の場合、入試当初の研究計画の内容は博士前期課程の二年間で大きく変わりました。しかし、それも限られた研究期間の中で、恵まれた指導体制と充実した資料環境（図書館など）によって得られた結果だと思っています。本コースの特徴は、大きく科学技術文明と言語文化の二つの研究分野に分かれます。異なる分野の境界を越えて、学生生活の中で仲間と研究について語り合えるのは自身の研究への刺激になります。また、コースにとられない横断可能な履修システムによって、芸術、思想、文学など、あらゆる視点から自身の研究を深めていくことが可能です。入学時の研究計画を進めていくことも本分ですが、授業を通して得られる研究の新たな視点、見直し、深化は、自分次第でいくらでも研究に反映できると思います。充実した研究生活を支える環境が整っています。



白井 智子さん

(2014年度博士後期課程修了)

クレルモン＝フェラン第2大学人文社会学研究所修士課程修了。

研究テーマは「生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流」。

現在、姫路日仏協会会長。

私は、本大学院入学以前、フランス語教育と日本語教育に携わる傍ら、兵庫とフランスとの交流史を色々な時代・人物に焦点を当てて調査・研究していました。しかし、これらの研究は題材が多様で一貫性を欠いていたため、ご専門の先生方からご指導いただきながら、これまでの調査結果を練り直し、さらに研究を深めて博士論文として一つに纏め上げたいと考え、大学院入学を決めました。

本コースを選んだ理由は、私が探求していた文化交流や比較文化、科学技術史が専門の先生がいらしたことに加え、様々な国や時代における文明や文化、歴史に精通された先生方が結集して、多方面から研究指導に当たっておられたからでした。また、国際文化学研究所は、所属コースに関係なく、他コースの授業も履修可能なため、より一層学際的研究ができ、その上、本大学は複数のフランスの大学と協定を結んでおり、院生でも留学できる機会を得られることも私にとって大きな魅力でした。

在籍中、指導教授を始め、日仏両国で諸先生方からきめ細かなご指導を頂戴し、様々な観点から多角的に研究を進め、大きな成果を挙げることができました。恵まれた環境の中で充実した研究生活を送ることができ、私にとって掛替えのない素晴らしい3年間でした。

Q&A

理系じゃなくても大丈夫？

複雑多様な社会を理解する上で、科学的な物事の見方を身につけることはとても有意義だと思うのですが、大学時代は文系でした。本コースでの研究には理系の学問的基礎が必要なのでしょうか？

私たちのコースでは、科学史や科学技術社会論も勉強できますが、これは科学的・文化的・社会的意義や科学の歴史、東西の科学思想の交流等を研究する科目で、必ずしも、高度な自然科学についての知識や、理系の専門性を要求するものではありません。文系の方でもまったく大丈夫です。

海外と日本の古典を同時に研究？

これからの国際社会では世界各地域の文明や文化の比較や相互影響についての知識は不可欠だと思うのですが、幅広い国内外の古典や複数の文化などを並行して研究できるか不安です。

私たちのコースでは古典のみならず近・現代の文化や文学の研究もおこなえます。重要なのは、むしろ複数の文化や文明を比較するという研究姿勢で、研究テーマが定まれば、それを掘り下げたり、広げたりするための豊富なリソースが用意されています。すべての分野と科目への関心・学習が均等に要求されるわけではなく、みなさんが研究テーマを選択したとき、そうした幅広い視野から多様なアドバイスと柔軟なサポートを受けられるのだと考えてください。

国際関係・比較政治論コース



本コースでは、社会科学をベースに世界各地域の政治現象を捉えることを目指しています。たとえば、国際社会の変容を踏まえながら、国内の政治と社会の関係が変化する様態を浮き彫りにする高度な研究が、院生によって進められています。また、従来の政治学や国際関係論では十分に取り上げられてこなかった分野横断的なテーマについて、積極的に現地調査を行いながら取り組む院生もいます。5名の教員は、国際政治学の主要なアプローチを全てカバーするバランス良い構成となっており、院生による新しい研究意欲に対応していく体制となっています。

特筆したい点として、論文作成の基本に関して新年度毎にオリエンテーションを行っています。また論文作成指導では、前期課程と後期課程の院生が全員、毎学期出席するグループ研究発表会を実施しています。この場の知的迫力は、ぜひ体験して頂きたいものです。教員と院生の全員が協力して徹底した検討を加え、オープンな場で鍛え合っています。この過程で、参加者には、向上心、自発性や集団での作法が身に付きます。また国際政治学の基礎から応用までを修得し、また社会に出ても通用する思考力や討論力が体得されます。

本コースでは、院生がどんな研究テーマを選択しても、新しい多文化共生のあり方を大切に視線に身に付けて頂きたいと思っています。教育政策、移民問題、民主化、ナショナリズムの動態、安全保障問題、福祉制度などについて、政治と文化の関連に注目するアプローチを用いて研究が積み上げられてきたのも本コースの特徴です。また前期課程では歴史学を修めた方が、後期課程で政治学を身に付けたい、といった学際的な院生の志向に対応してきました。キャリアアップの方にも、研究者志望の方にも、きっと自分を向上させるきっかけを見つけてもらえるはずと信じています。

わたしたちと共に、新しい国際社会のあり方を見出そうではありませんか!

就職実績 (前期課程) 関西経済連合会、大阪市、神戸大学職員、日本新薬、テス・エンジニアリング、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、国際交流基金、(株)日本オラル
(後期課程) アジア経済研究所、Promis学術研究員、日本経済研究所、安全保障貿易情報センター、関西学院大学国際学部専任講師

在籍学生数 (前期課程) 7名
(後期課程) 5名

論文テーマ例 The Futenma Relocation Problem in the U.S-Japan Military Alliance、米国連邦議会下院議員の投票行動の分析、セルビアのヨーロッパ化～メディア表現の自由とコソヴォとの関係正常化に注目して、イラン核問題における討議の論理、スウェーデンにおける移民政策の変容と移民の周辺化？ 1990年代以降のワークフェア強化による集住化と格差拡大、エジプトにおけるテロリズムの社会運動論的分析

所属教員の紹介

坂井 一成 教授 国際政治社会論特殊講義ほか

ヨーロッパ統合の進展と課題、民族問題、地中海国際関係、移民難民問題、現代フランス政治などを主として研究しています。

阪野 智一 教授 比較政治社会論特殊講義ほか

ヨーロッパ統合と国内政治経済、福祉国家の再編過程、現代イギリス政治、政党政治研究などの分野を主として研究しています。

新川 匠郎 講師 多文化政治社会論特殊講義ほか

議会と政府の関係、ドイツ・ヨーロッパの政治、質的比較の手法を主に研究しています。

中村 覚 教授 比較地域社会論特殊講義ほか

国際政治学の諸理論を見直し、新興・発展途上国地域における紛争予防、多文化主義、テロ対策等に適するアプローチやモデルを探索しています。中東・ムスリム地域の安全保障、日本と中東の関係を含む国際関係、国家形成を研究しています。

安岡 正晴 准教授 比較地域政治論特殊講義ほか

現代アメリカ政治（特に移民・人種問題、連邦制、日米中関係など）を研究しています。

院生からのメッセージ

LEE SEUNGHAN さん

(博士前期課程 2年)

高知県立大学文化学部卒業

研究テーマ:「核兵器政策決定における政治体制の比較研究」



韓国で高校を卒業後、より学びの場を広げるために来日し、東京で1年間、日本語を学習した後、高知で大学を卒業し、現在に至ります。

私は、中東・アラブ諸国を事例として、権威主義体制国家と民主主義体制国家の外交政策決定過程を比較しています。国際紛争の多くは、発展途上国地域で発生しますが、既存の理論研究は先進国を中心としているという問題点があると考え、私の研究が紛争解決・予防の鍵となるよう期待しています。将来は、外務省や外交を専門とする研究機関で、大学院で得た知識と経験を生かしたいと考えています。

本コースでは、既存の政治学や国際関係を踏まえ、民族や多文化主義、テロ対策を含む安全保障など、今日、国際社会で我々が考えるべき事案に目を向けることができます。そのためには、多様な目線から考察することが望ましく、毎年、複数回の研究発表会で、指導教員に限らず、多くの先生と学生たちで話し合う場が設けられています。また、院生研究室では院生同士で常に研究での疑問点などを共有することができ、共に成長できる環境になっています。私は文化学部を卒業したことから、国際関係・比較政治の知識が足りないのではないかと大学院進学前には大変に心配していましたが、入学後、このような環境で研究を進め、自己発展の日々を過ごしています。

私を含む海外からの留学生や、様々なところで留学を経験した院生たちと考えを共有することで、世界へ視野を広げ、より楽しく有意義な大学院生活を送れることもポイントです。このような環境で、我々は未来へ向かっています。

修了学生からのメッセージ

木村 英里菜さん

2018年ナポリ東洋大学アジア・アフリカ研究科博士前期課程修了。

2019年神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了。



私は、学部時代には英語文化学科に所属していましたが、オーストラリア等への留学を経て国際関係学に関心を持つこととなり、当コースに進学しました。

国際関係学の中でも「非伝統的外交」に特に関心を抱き、修士課程では、「日本の広報文化外交政策の理論的考察」と題し、日本のパブリック・ディプロマシー政策をいくつかのモデルを通して理解することを試みました。また、大学院時代には、イタリア・ナポリへの二重学位留学にも挑戦させていただく機会を得て、アジアとは異なる広い視野から学ぶ大変貴重な経験となりました。

現在所属している職場は、まさに自らが研究対象としてきた広報文化外交政策を日本で唯一の公的機関として担う場であり、研究で得た知識を実務のレベルで理解し直しつつ、充実した日々を送っています。そのような中、修士課程で得た「調査力」や、「論理的思考」、さらにそれらをわかりやすく他者に伝える「プレゼンテーション能力」は、非常に役に立っているスキルといえます。

今後は、大学院で学んだことをベースとしつつ、博士後期課程への進学も見据え、実務と研究の両側面から「パブリック・ディプロマシー政策」を理解し、そして発信できるよう、さらに邁進したいと思います。

井上 司さん

(博士前期課程 3年)

研究テーマ:「現代アメリカの司法政治における保守主義」



私は、安岡正晴先生の指導のもと、道徳的政策をめぐるアメリカ連邦最高裁裁判を研究しており、修士論文では戦後の保守主義運動に着目しながら判決と裁判官の投票の計量的分析を行いました。

私が本コースに進学した理由は、分野横断的に新たに知見を身につけながら学際的な環境で研究を進めたかったからです。いま振り返ると、その期待通りに実りの多い研究生生活を過ごすことができたと思っています。本コースには政治学とはいっても、フィールドでは欧米、中東、日本、分野では政治過程論、

政治史、計量政治学というように、各自異なる専門をもつ教員・学生が在籍しているので、授業での学びや研究成果のフィードバックを通じて自分の考えに抜け落ちていた重要な研究のヒントをふと見つけ出すという機会が多くあります。また研究の方法論に関しても皆それぞれ独自のスタイルをもっているため、一見自分の研究テーマとかけ離れた研究発表であってもそこでの議論展開や分析方法において大きな刺激を受けることもあります。風通しのよい雰囲気と充実した研究環境のなかで毎日楽しく研究に打ち込むことができたこと、お世話になった先生方と研究室の仲間たちには大変感謝しています。

佐藤 良輔さん

2018年度博士後期課程修了

京都産業大学外国語学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。

現在、神戸大学大学院国際文化学研究所科学術研究員。



私は、学部生の時にイタリア語を専攻し、大学院でイタリアの移民問題について研究しました。博士論文では、イタリアの移民政策の発展過程において重要な役割を果たした要因について、政治学の知見に基づきながら考察しました。

国際関係・比較政治論コースの特徴は、コースの教員と学生が参加する研究発表会が毎学期開催されることです。発表前に指導教員の先生と面談し、その後の発表会で多角的な視点から批評を受けながら、学位論文の執筆を進めます。このように研究指導を定期的に受けたことは、モチベーションの維持に繋がります。

また、国際文化学研究所には様々なコースが置かれているので、所属するコース以外の授業も履修することができます。博士前期課程のときに参加したフィールドワークについての授業は特に興味深く、有意義な時間でした。大学院での年月はあまり長くはないですが、様々な学問に触れることで多くの刺激を受け、充実した研究生生活を送ることができると思います。

また、国際文化学研究所には様々なコースが置かれているので、所属するコース以外の授業も履修することができます。博士前期課程のときに参加したフィールドワークについての授業は特に興味深く、有意義な時間でした。大学院での年月はあまり長くはないですが、様々な学問に触れることで多くの刺激を受け、充実した研究生生活を送ることができると思います。

Q&A

学部では政治学や国際関係論を専攻していたわけではないのですが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で専攻している必要はありませんが、研究をより実りあるものとするために、入学までに予め基本的知識を身につけておくのと良いでしょう。

現代政治の複雑な諸問題を理解するためには、これまでの学問領域を横断したり

乗り越えたりしながら、新しい知見を目指す営みは意義高い挑戦であると考えられます。

オープンキャンパスで政治学の勉強の仕方に関して説明しますので、ぜひお越しください。

モダニティ論コース



国民国家という政治原理であれ市場という経済原理であれ、あるいは小説という文学形式であれ遠近法という絵画技法であれ、西欧近代に由来するこれらの社会的・文化的な装置は、現代世界の基本的な枠組みをかたちづくってきました。ところが現在、この西欧近代の原理（モダニティ）は、グローバル化の進展とともに根底から揺らいでいます。こうしたなかで求められているのは、あらためて「モダニティ」の意味を問いなおし、激動する世界のゆくえを的確に読み解くことだといえるでしょう。本コースでは、近現代の社会思想・経済思想・政治思想・文化言説・表象文化を丁寧に分析することをつうじて、アクチュアルな課題に応えうる足腰の強い思考力を養成することをめざしています。

所属教員の紹介

石田 圭子 准教授 文化言説系譜論特殊講義ほか

美学・表象文化論。近代以降の芸術と政治の関わり、芸術における他者とのコミュニケーションなどをテーマにしています。

著書：『美学から政治へ モダニズムの詩人とファシズム』（慶応大学出版会）など。

市田 良彦 教授 近代経済思想系譜論特殊講義ほか

社会思想史。アルチュセール、フーコー、ドゥルーズなどのフランス現代思想を中心に、今日における政治・経済・文化の哲学的分節を考察しています。

著書：『アルチュセール ある連結の哲学』（平凡社）など。

上野 成利 教授 近代政治思想系譜論特殊講義ほか

政治思想・社会思想史。ホルクハイマー、アドルノらフランクフルト学派にかんする思想史研究を基軸としながら、「暴力」「自由」「公共性」等の鍵概念の社会哲学的な分析に取り組んでいます。

著書：『思考のフロンティア 暴力』（岩波書店）など。

松家 理恵 教授 表象文化系譜論特殊講義ほか

イギリス文学。18世紀からロマン主義のイギリス文学・思想を中心に、近代の自然観や共感的想像力について現代における意味を考察しています。

著書：『キーツとアポロローンジョン・キーツの詩とギリシア・ローマ神話』（英宝社）など。

就職実績 (前期課程) 西宮市役所、神戸大学(職員)、日本山村硝子、高知新聞社(記者)、共同通信社(記者)、イオン、がんこフードサービス、オーケー株式会社、金蘭中学校・高等学校(教員)、JNC、兵庫県高校教員(英語)、宝塚市役所 他
(後期課程) トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学科専任講師

在籍学生数 (前期課程) 2名
(後期課程) 3名

論文テーマ例 (前期課程) ミシェル・フーコーとエルキュリーヌ・バルバン、ピーター・バーガーの「日常」概念と宗教、批判理論における＜女性的なもの/母性的なもの＞をめぐって、E・フロムとフランクフルト学派—批判理論における精神分析学の受容をめぐって、H・アーレントにおける赦しの概念について、H・アーレントの現象学的決断主義—複数性概念の再考、自由とその制度化—H・アーレントの行為論、W・ベンヤミンにおける神話理論—永遠帰還とアレゴリーとの関係について、W・ベンヤミンの初期言語哲学再考—翻訳と批評を中心にして、ドゥルーズにおける革命の諸問題、戦時中上海映画におけるジェンダー表象、ヴァナキュラー・モダニズムとしての映画—ミリアム・ハンセンの映画理論について 他
(後期課程) エルンスト・ユンガー、技術と近代、ニクラス・ルーマン、社会システム論、ハーバート・スペンサー、映画と公共圏、D.H. ロレンス、エコクリティシズム、他

所属学生からのメッセージ

下中 隆太郎さん

(博士前期課程 2年)
神戸大学国際文化学部卒業。
研究テーマ：「H. アーレントの判断力論」



私は専門として、H. アーレントという、20世紀を生きたユダヤ系の政治思想家に取り組んでいます。私の目標は、アーレントが、M. ハイデガー、K. ヤスパースといった同時代の哲学者の薫陶を受け、得られた哲学的知見を、社会的、歴史的出来事に直視しながら、いかに政治理論に練り上げていったのかを明らかにすることです。専ら文献に向き合う日々で、私はともしと独りよがりな思考に陥りがちですが、自分の専門と隣接したテーマを扱う授業に参加したり、専門を異にする先生方から助言をいただいたりすることで、新たな気づきを得て研究を進めることができます。

本コースでは、古典を精読することに重点が置かれています。なかでも外国語講読の授業は、その道の専門家から指導していただくことで、原文を読み、理解する技術のよき鍛錬になります。単に外国語での読解力向上だけが狙いではありません。いかなる言語も特定の思考及び生活形式と密接不可分です。よって外国語原文を読み、その言語でしか表現できない事柄に出会うことで、特定の言語(私の場合はドイツ語と英語)圏における考え方や経験への理解を深め、その上で研究を行うことができます。

欧米の政治思想に向き合うことで、「身近な」対象を「一歩退いて眺める」ことができるようになると実感しています。アーレントは、古代ギリシアやローマにまで遡って、政治概念の意味を問いました。その意図の一つは、現代で自明とされる概念を古代に遡って捉え直すことで、現代を新たに理解できるようにすることです。似たようなことが私自身にも当てはまります。つまり、欧米の近現代政治思想を知ること、(例えば日本という)身近な対象について再発見できることがあります。本コースでその重要性に気づかされた一歩退いて眺める視座は、研究の道に進むにしろ、就職するにしろ、有意義であると確信しています。

修了学生からのメッセージ

吉峯 旬作さん

(2015年度博士前期課程修了)
研究テーマ：「H・アーレントの政治思想研究」
現在、兵庫県公立高等学校教員。



子どものころから体育系運動部に所属し、ある種の共同体的空間になじみの深かった私は、学部の講義で耳にした「公共性」という言葉に新鮮さを感じました。互いに異なる者どうしが時間や空間を共有するというその概念に興味を抱き、もっと深く勉強したいと意気込み、大学院へ進学しました。

ドイツ・ベルリンへの交換留学も含め、4年間にわたりH・アーレントの政治思想研究に打ち込ませていただきました。しかし修士論文は、書きたいと思っていた内容にはほど遠く、良くも悪くも自分の文を知ることができ、自分の適性をより活かせるような進路を考えるようになりました。

現在は県立龍野北高等学校(定時制課程)に英語科教員として勤務しています。兵庫県の西の端、醤油や豆腐めんが有名なたつの市にある夜間高校です。生徒たちは、屋に仕事や家事、育児などを行ない夕方から登校します。教室という公共空間で、互いの背景に配慮しながら苦楽を共にすることで、地元で活躍する市民へと成長していきます。

私自身、体育祭や文化祭、災害ボランティアを生徒と共に計画・実行する中で、研究室での学びとは異なる学びを日々させてもらっています。ですが、生徒の思いにじっくりと耳を傾け、時に粘り強く語りかける教員として必要な姿勢は、研究室で学友と共に思考し、語り合った経験から学び得たものです。

教育現場に身を置いて当時を振り返ると、コースの先生方や研究科の職員の方々から、勉学に没頭できる環境を与えられたことに改めて有り難さを感じます。目先の利益にとらわれず、やりたいことに没頭できた時間は、私にとって生涯の財産です。研究職を志す方以外にも広く門戸は開かれていると思います。

研究科への進学を考えている方は、将来の進路のことなどに不安を抱いていると思いますが、熱意をもって勉学に励む学生を応援してくれる環境がそこにあります。

Q&A

研究テーマを絞り込むのではなく、広く「モダニティ」全般について学ぶことは可能でしょうか？

可能です。むしろ近現代の思想的諸問題について広く学べることが、モダニティ論コースの強みともいえます。とりわけ前期課程のキャリアアップ型プログラム履修生の場合には、社会思想・経済思想・政治思想から文化言説・表象文化にいたる科目群を広く履修しながら、幅広い分野について知見を深めることが望ましいでしょう。研究者養成型プログラム履修生の場合には、もちろん適切にテーマを絞り込まなければ修士論文を執筆することは不可能ですが、従来型の大学院では扱いにくい学際的な主題を正面から取り上げることができる点が本コースの最大の特長といえます。



池田 直樹さん

(博士後期課程 3年生)
神戸大学国際文化学部卒業。
神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。
研究テーマ：「ピーター・バーガーにおける信仰と社会学思想の相克」

私の専門はピーター・バーガーという人物を中心にした20世紀後半のアメリカの社会学思想史です。近代思想全般についての該博な知識を必要とするテーマですが、本コースで開講されている社会思想史、政治思想史、美学、文学等のゼミが大いに私の助けとなっています。また本コースの特徴はテキストの丁寧な読解を大切にすることにありと云えます。すぐに役立つ知識はすぐに役に立たなくなる知識です。迂遠な道に思われるかもしれませんが、テキストを読むという作業はしなやかで強靱な思考を身につけるためには不可欠です。皮相な理解ではなく、根本的なものを問いつけることこそが重要なのです。考える力を養おうとするならば、本コースは最良の環境でしょう。



川本 健二さん

大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。2011年度神戸大学総合人間科学研究科博士前期課程修了、神戸大学国際文化学研究所博士後期課程修了。研究テーマ：写真を中心としたメディア文化。また、日本語教育でもメディアを活用した言語教育の在り方とそこの「文化」の扱い方について研究している。現在、トルコ・チャナクカレオンセキスマルト大学日本語教育学科の助教授を務める傍ら、写真史についての調査や写真家活動も行っている。

モダニティ論講座は、社会学、思想、哲学、政治学、美学などの既存の学問領域にとらわれない講座です。私の場合は「写真」という切り口でしたが、この講座の大きな枠組みの中で自分のテーマに向き合えたおかげで、写真の芸術作品論に終始せず、写真イメージの「技術と生産」の研究として、また撮影者に注目した「主体」の研究として、独自の展開ができたと思っています。

もちろん、現在の就職事情を考えれば、大学院でこのような思想的テーマを選ぶことはリスクがあると言わざるをえません。しかしグローバル化が進む中で、この講座が行う「文化」「社会」などへの根本的な問いかけは、どのような分野であっても、ますます必要なものとなっていることは確かです。現在、トルコでの写真の調査や、他分野である言語教育やその研究プロジェクトなどにも参加していますが、ここでもモダニティ論が扱う議論がいかに重要なものであるかを実感しています。

社会学的、思想的な課題に向き合いたい方はもちろんですが、特定の文化的現象を学際的に捉え直したい方にとっても、この講座での経験は実り多きものになると思います。

フランス思想やドイツ思想を研究したいのですが、仏語や独語の知識はどれくらい必要でしょうか？

前期課程「研究者養成型」プログラム志望者でフランス思想やドイツ思想を研究対象とする人の場合には、仏語や独語の読解力をある程度そなえていることが望ましいといえます。独仏語で受験できればそれに越したことはありません。とはいえ入試そのものは英語で受験することが可能です。受験に臨んでまずは英語の読解力に磨きをかけ、前期課程のあいだに仏語や独語の読解力を鍛えてゆけばよいでしょう。むしろ英米思想の研究志望者の場合には、独仏語の代わりに英語のテキスト読解にじっくり注力してください(なおキャリアアップ型プログラム履修生の場合には独仏語をかみならずしも必要としないと考えてもらって差し支えありません)。

先端社会論コース

現代社会では、人間・自然・社会の相互関係が大きく揺らぎ、ますます複雑化してきています。「先端社会論」コースは、この現代社会の先端的な問題群を、人文・社会科学を交差する学際的アプローチによって、領域横断的に検討することを課題としています。例えば、男女の性差を社会的に構成されたものにとらえるジェンダー論の視点から、家族や個人や国家をめぐる考え方の変化を分析すること。貧困、移住、人権侵害、体制転換などのグローバルな課題の公正な解決法を構想すること。メディア・テクノロジーの革新が促進する消費社会の情報化と多文化社会が要請する新たな社会観や人間観を模索すること。「先端社会論」コースは、こうした錯綜する諸問題を理論的に解きほぐし、それらに現実的に対処していくためのトレーニングの場です。

進路実績 (前期課程) 兵庫県庁、富士通BSC、(株)三菱倉庫、(株)コベルコシステムなど
(後期課程) 花園大学文学部創造表現学科准教授、京大グローバルCOE研究員など

在籍学生数 (前期課程) 8名
(後期課程) 5名

論文テーマ例 (前期課程)

- 日米印三国におけるインフォームド・コンセントの比較・検討
- The Politics of 'Koizumi Theatre': On the Reconstruction of Japanese Nation-State at the Neo-Liberal Moment
- 代理出産の「資格」
- 日本における外国人技能実習制度の現在—中国人技能実習生の調査を踏まえて
- Representation of Romanies in Tony Gatlif's films
- ニュー・クエア・シネマが抱える消費と可視性のジレンマ
- Can "Street Dance" Speak(by Dancing)?-A Study of the Policing of Street Dance Scenes in Taiwan
- What is "Gayness?" -From Narratives in Britain and Japan
- 宝塚歌劇はなぜ女性観客を集めるのか
—日本と中国における『ベルサイユのばら』の観劇レポート分析を中心に
- 東方で生まれた二人のシャーロック・ホームズ
—『半七捕物帳』と『霍桑探案』の比較研究

(後期課程)

- Occupation and Sexuality:GHQ's Policy-Making on Prostitution
- 関係性としてのフェミニズム—イメージ、個人、方法論の相互作用から
- 道徳的個人主義の展開と「心」の変化
- 「つくられる共同体」の社会学的研究

所属教員の紹介

青山 薫 教授 ジェンダー社会文化論特殊講義ほか

専門は社会学、ジェンダーとセクシュアリティ。グローバル化、多文化主義、社会的排除と包摂、親密権、表象の問題などに関心を持ち、移住、ケア/性労働、同性婚、性同一性「障害」など、公私にわたる変化を引き起こす事象について、理論・方法論・実証研究を結びつけて追求しています。

小笠原 博毅 教授 メディア社会文化論特殊講義ほか

専門は社会学、カルチュラル・スタディーズ。とくにメディアとスポーツをフィールドとして多文化資本主義と人種差別的な文化との関係を、実証的、理論的、かつ思想的に検証し考察しています。

西澤 晃彦 教授 現代社会理論特殊講義ほか

専門は社会学、都市社会学、社会問題論。社会的排除と貧困を主たるテーマとして、自己アイデンティティの構築・社会的世界の形成・都市空間の構成と社会的排除の関連について研究を行ってきました。

桜井 徹 教授 現代法規範論特殊講義ほか

専門は法哲学、「グローバル・ジャスティス」。つまり、移民・難民問題、経済格差、テロ、人権侵害といったグローバルな課題を前に、国境という境界線がいかなる意味をもつのかというテーマを研究していますが、最近は特に、国際移住が増加する中で、普遍的な人権の保護とナショナリズムの再興との間の衝突をいかに調整するかという問題に取り組んでいます。

所属学生からのメッセージ

フィリップ・ヒューズさん

(博士後期課程 3年)
イギリス、リバプール・ジョン・ムーア大学経営学部卒業。
研究テーマ: Gayness and Identity

神戸大学国際文化学研究所に入学したきっかけは、現代における社会問題とその背景にある事情を学ぶことも、現在の日本と私の出身地であるイギリスなど他国との関係を歴史的にさかのぼって学ぶこともでき、広い学際的視野で研究ができると考えたからです。実際に、研究科には、研究に励むことができる環境が整っており、追究したいことが追究できる自由さがあります。自分自身の研究テーマは、世界でも日本企業でも課題となっている性的少数者 (LGBT) への社会の対応についてですが、とくに私が所属する先端社会論コースは、このような先進的課題を研究するのに最適のコースだと思います。

研究科全体が、多様性を尊重することを重要視しており、異なる国、文化、常識が常に身近にある環境となっています。その中で生活することは、自分自身にとって大変貴重な経験になります。また、大学院で研究を行う上で、毎週必ず何らかの演習や講義が行われ、指導教員のアドバイスを受けることができるようになっています。その中で研究することは、学問的人間的に成長し続けることであると感じています。



趙 姍 (チョウ サン) さん

(博士前期課程 2年)
青島大学外国語学院日本語学卒業。
研究テーマ: 「日本における技能実習生たちを支援する NGO」

青島大学日本語専攻を卒業してから日系企業で働きました。日本企業の文化に馴染んでいく中で、異文化間のぶつかりも深く感じました。隣国の日本をもっと総合的に理解したく日本に留学することを決意しました。東京にいた時、中国からの技能実習生たちを知り、彼らが日本で置かれた境地に強く関心を持つようになり、「移住者と連帯するネットワーク」という NGO で中国語通訳としてボランティア活動を行いました。そして、この社会問題をもっと深く分析しようと考え、神戸大学大学院国際文化学研究所先端社会論コースに進学しました。

私の研究は日本における技能実習生たちを支援する NGO に関する考察です。1年目は様々な専門領域を持つ先生方の演習や講義に日々参加し、理論的な知識の構築と研究方法の習得に努力しました。同時に指導の先生とゼミの院生たちからアドバイスをいただき、自分の研究方向を確立できました。

研究科には自由さと多様性が溢れ、どのコースにも異なる国からの学生が多く、みんなと一緒に授業・議論することによって、日本語と英語の進捗とともに国際的学際的な視野を養うことができます。社会人としても留学生としても何の不自由もなく、恵まれた研究環境で共に成長できます。優れた先生たちと優秀な学生たちと出会って良かったといつも思っています。

修了学生からのメッセージ

張 嘉慧さん

(博士前期修了)

私は、学部時代の卒業論文の課題をさらに研究したいと思い、神戸大学国際文化学研究所に入学しました。博士前期課程で取り組んだ研究テーマは「宝塚歌劇はなぜ女性観客を集めるのか—日本と中国における『ヘルサイユのぼら』の観劇レポート分析を中心に」です。具体的には、日中の SNS における宝塚歌劇の観劇レポートを比較考察し、一定の日中若年女性の生き方や女性の間の関係性に対する願望の傾向の、類似点と相違点を分析し、修士論文を書きました。

在学期間中、コースでは、自分で専攻領域や研究課題を追求することはもちろん、演習などで研究に必要な知識や指導教員の意見を受けることができました。また、研究科全体では様々な分野の演習や講義が設けられ、複数の分野の先生・院生の意見を聞き、啓発を受けることができました。便利な研究環境も備えられており、グローバルな学術ゼミに参加する機会も多く、多様な国籍や経歴をもつ先生方や院生の仲間とともに学び、視野を広げることができました。国際文化学研究所・先端社会論コースは、学問的にも人間としての成長にとっても、とても恵まれた環境だったと言えることができます。

田 恩伊 (チョン ウニ) さん

(2011 年度博士後期課程修了)

神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期・後期課程修了後、京都大学 Global COE Program 研究員に就任。
博士論文のタイトルは「『つくられる共同体』の社会的な研究——共同体運動の現代的意味と新たな展開」。現在の研究テーマは「現代の共同体をめぐる公共政策の新たな取り組みについて——日本と韓国の公共政策から」。

大学で研究者としての訓練を受けて「研究者たちの社会」に出てみると（入ってみると）という表現が正しいのかもしれませんが、自分の専門領域だけではなく、それと関連する様々な領域の知的訓練がどれだけ貴重で役に立つものかがよく分かってきます。というのは、緻密にミクロな世界を探りながらも全体としての社会を考えていきたいと願っている私自身の研究姿勢からすると、理論と実践両方からなる深い専門的知識はもちろん、社会的市民活動・交流への参加など、時には国籍を越境する実践的行動力を必要とする場合があるからです。

この先端社会論コースに設けられている社会学、哲学、法学、文化研究などの幅広い研究領域には、こうした研究活動に直結する高度な知的訓練装置が用意されています。もちろん、研究科のこうした装置を自分のものにできるかどうかは、あなた自身の努力と心構えによりますが！ この研究科は、多くの領域を融合させ現代社会をよりユニークな視点から探究したい人にとって、堅実な専門性を培ってくれる場だと思います。

Q&A

コース名の「先端社会論」っていう言葉はあまり聞いたことがなく、なじみがないのですが？

そうですね。「先端社会」ってどんな社会なの？と思われちゃうかもしれませんね。でも、「先端社会論」コースは、「先端社会を論じる」コースではなく、「先端的な社会問題を論じる」コース、っていう意味なんです。もう少し詳しくいうと、「現代社会の先端的な問題群に学際的に取りくむ」コースです。

ああ。そうだったんですか。だけど、「先端的な問題群」って、たとえばどんな問題ですか？

科学技術の進歩とか情報化、それにグローバル化とか、現代社会に特有な性格によって引き起こされている新しい問題群、っていったらいいかしらね。たとえば格差と貧困、レイシズム、国際移住の増加に伴う多文化化とか。身近なところでは、男女の性差の意味合いがゆれ動いていることとか。

そういう問題だったら、ずっと気になっていたことにカブってくるかなあ。でも、さきほど「学際的に取りくむ」っていうお話でしたけれど、専門分野としてはどうなるんでしょうか？

専門分野っていう言い方をすると、今現在のコーススタッフは、社会学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー論、法学、哲学っていうことになるかしら。けれども、

「学際的に取りくむ」っていうことは、そうした従来の分野が単独では扱いきれない問題に取りくむ、っていうことですから、あまり専門分野は気にしなくてもいいんじゃないかしらね。

それにしても、学部時代の専門とはだいぶズレているんですが、たいじょうぶでしようか？

この研究科には、そういう人のためにキャリアアップ型プログラムがありますし、入試問題に合格点が取れるだけの基礎学力があれば、あとは入学後の熱意と努力だと思いますよ。

すみません。私も質問していいですか。私はドクターまで進学したいという希望を持っているのですが、先端社会論コースの研究者養成型プログラムの入試はかなり難関なんでしょうか？

ドクター進学を考えているのなら、前期課程の入試よりもむしろ後期課程の入試に注意してください。募集人数を見てもわかりますように、前期課程に入学しても後期課程に進学できるとは限りませんから。研究者養成型プログラムを選択するのでしたら、前期課程・後期課程の5年間で博士論文を完成させるつもりで、そのために必要な基礎学力をしっかり身につけておいてくださいな。

芸術文化論コース



芸術文化論コースは、芸術文化コンテンツ系と芸術文化環境系から構成され、造形美術（絵画）、文学、舞台芸術（音楽、オペラ、演劇）、ファッションなどの芸術（アート）作品と社会との関わりについて研究しています。

コンテンツ系では作品内容の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観を考えます。環境系では、創作の自由やアートへ容易にアクセスできる権利の保障、文化施設運営の実際などについて、国際比較を踏まえて考察し、文化政策のグランドデザインや、その具体的実践としての芸術と社会をつなぐアートマネジメントに取り組んでいます。

本コースでは、学部時代の専門に関わらず、芸術とそれを支える環境に関心を持ち、専門的に学ぼうとする意欲にあふれた学生の受験を歓迎します。

所属教員の紹介

池上 裕子 准教授 現代芸術動態論特殊講義ほか

第二次世界大戦後の美術と国際美術シーンのグローバル化。専門はアメリカ美術ですが、戦後の国際政治における文化外交にも関心があり、日米交渉史や戦後日本美術の研究に取り組んでいます。綿密な作品研究から芸術を比較文化的・社会政治的に論じることを目指しています。

岩本 和子 教授 芸術文化共生論特殊講義ほか

研究テーマはフランス語圏文化、特に19世紀のフランス文学と、隣の多言語国家ベルギーにおける文化的アイデンティティの問題や文化政策です。また、マグレブ、クレオールなどのフランス語圏ポストコロニアル文化、マイノリティ文化にも関心があります。

進路実績（前期課程） 神戸大学連携創造本部助教、兵庫県立芸術文化センター職員、公益財団法人びわ湖ホール職員、神戸市民文化振興財団職員、神戸市灘区民センター指定管理者、関西フィルハーモニー管弦楽団、同志社大学職員、大阪大学職員、安芸市役所、豊岡市職員、カフェ・カンパニー、NHK、京都市役所、他

（後期課程） 同志社大学教授、福井大学准教授、京都橘大学准教授、東北工業大学准教授、大阪府商工労働部主任研究員、サントリーホールディングス、神戸大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、関西学院大学非常勤講師、大手前大学非常勤講師、流通科学大学非常勤講師、龍谷大学准教授。

在籍学生数（前期課程） 16名
（後期課程） 3名

論文テーマ例（前期課程） 地域コミュニティ、パブリックシアターの組織運営、民間非営利組織間のネットワーク形成、持続可能なコミュニティアート、ベルリンの「社会文化センター」、スウェーデンの文化政策と市民活動、シンガポールの文化政策、文化遺産の保護と活用：フランスと中国の旧市街地、パリ市の都市空間整備、ロシア帝政期の教会建築、ジャポニスム、林忠正、印象派画家カイユボット、フランスの女性作家、前衛書と抽象表現主義絵画、コルセットの表象、日本のストリートファッション、他

（後期課程） 文化政策と社会的包摂、日本の近代広告、ドームエと近代都市パリ、戦前の日本における近代フランス音楽の受容、ジャポニスム期の日本陶磁器コレクションと日仏の交易、宮沢賢治と光学、他

藤野 一夫 教授 文化環境形成論特殊講義ほか

音楽文化論、文化政策、アートマネジメントについて、理論と実践の両輪で取り組んでいます。近年アートが創造都市や地域活性化の道具として注目されていますが、芸術文化の公共的価値はもっと多様であることを明らかにしたいと考えています。

松井 裕美 講師 現代芸術社会論特殊講義ほか

20世紀フランスの前衛美術を専門に、芸術と政治社会、文学、科学との関係について考える研究をおこなっています。授業では、西洋の近現代美術の成り立ちを理解しながら、認識や価値の形成、アイデンティティの問題などを考える機会を皆さんと共有していきたいと思ひます。

所属学生からのメッセージ



劉 丹さん

(博士後期課程 1年)

陝西師範大学外国語学部日本語学科卒業

研究テーマは「中日におけるフランス文学の受容に関する考察——ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を中心に」

私は、中日におけるフランス文学の受容について研究しています。幼い頃から世界各国の文学作品を読んできて、世界各地の文化に興味を持っていました。中国と日本の近現代文学は、西洋文学に深く影響を受けたことがわかりました。博士前期課程において、フランス文学の巨匠ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を例として、この小説はいかに中日に移入され、受容されたのか、また中国への移入はいかに日本に影響されたのか、研究したいと思います。将来色々な国に足を踏み入れ、異文化研究についての仕事をしたいと思えます。

今は芸術文化論コースにおいて、フランス語圏文化についての知識を習い、自分の研究分野以外にも、様々な芸術分野の先生方からご指導をいただいています。幅広い知識に触れながら、専門的な研究をすることができ、国際交流の機会もたくさんあるのは、本コースの特色だと思います。留学しながら研究するのは大変ですが、恵まれた環境の下で充実した日々を過ごすことができています。これからも後期課程に入って研究を深めていこうと思います。



南田明美さん

大阪音楽大学音楽学部卒業、神戸大学発達科学部卒業（編入）、神戸大学大学院国際文化学研究所博士課程前期課程修了、シンガポール国立大学大学院人文社会学研究科留学。

日本学術振興会特別研究員（DC2、2016年-2018年）、南洋理工大学人文社会学部客員研究員（2016年-2017年）。現在、大阪音楽大学音楽学部助手。

私は、芸術社会学文化政策論を専門としています。研究テーマは、グローバル都市シンガポールにおけるコミュニティを対象とした芸術文化活動の歴史です。とりわけ、政府と市民社会が、国家観をめぐって、どのような問題で、対立し、交渉・協調関係を結んできたのかについて分析しています。

学外では、母校で助手を務めるほか、音楽大学の同級生とともに地域に寄り添った音楽活動を行い、関西圏における芸術文化環境の問題にも関心を寄せています。

文化政策研究では、理論と実践における各々の語法をつかみ取ることが大切です。本コースの先生方は、論文指導のほかに、芸術文化活動の「現場」に触れる多くの機会を下さいます。学部で芸術学を修めていなくても、芸術を読み解くうえで必要な「感性」を磨くことができると思えます。私の研究には、芸術学のみならず、社会学の理論と調査法の知識が必要ですが、コロキウム等を通して現代文化システム論講座に属する社会学の先生方からもアドバイスを頂けます。また、院生研究室では、芸術学と社会学の院生が共に過ごしていることから、互いの研究の隣接領域に関する情報交換も盛んです。長期の海外留学、短期海外研修における英語での研究発表の機会もあるほか、留学生も多く、国際的な視野をもって研究できます。

修了学生からのメッセージ



橋本 麻希さん

神戸大学発達科学部卒業、同大学院国際文化学研究所博士前期課程修了。

研究テーマはアートマネジメント、コミュニティアート。現在、城崎国際アートセンターにアートコーディネーターとして勤務（豊岡市職員）。

大学院在学中も、地域に根差した活動とともにコンテンポラリーダンスを発信するNPO法人DANCE BOX（神戸新長田）での劇場インターンや、別府現代芸術フェスティバルでのボランティアをはじめ、様々なアートプロジェクトの現場に関わりました。修了レポートでは、イギリス発祥のコミュニティアートの歴史を振り返り、日本において“地域に根差し持続可能な”アートプロジェクトとはどのようなものか、現場での経験とフィールドワークをもとにまとめました。

現在は、国内でも珍しい舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスの拠点「城崎国際アートセンター」に勤務し、アーティストの受け入れや地域の方々とアーティストとの交流プログラムのコーディネートを担当しています。専門性の高い授業を受けることができる一方で、現場にも積極的に出ていける研究科の雰囲気のお陰で、舞台芸術制作者としてのスタートを切ることができ先生方や学友たちに大変感謝しています。



寺田 卓矢さん

立命館大学政策科学部卒業、同大学院政策科学研究所博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究所博士後期課程修了。

研究テーマは近代日本音楽文化史。現在、兵庫県立芸術文化センター勤務。

国際文化学研究科在籍中は、アジア・太平洋戦争期の音楽運動に焦点を当て、激動の時代に山田耕筰や清水脩ら指導的音楽家が音楽によって何を訴えようとしたのか、そして時代の制約の中で成し遂げたこと、できなかったことを探求し、博士論文にまとめました。他方で多数のコンサートやシンポジウムの運営にも関わり、アーティストや研究者らの現代文化に関する刺激的な見識と情熱に触れることができました。常に研究と実践の両輪で進む大学院生時代でしたが、両者は絶えず交差しており、先人の功罪を知ることが「より良い未来」を具体的に構築していくための足場となっていったように思います。現在は公共劇場で専属オーケストラの運営を担当しており、日々、国内外の第一線で活躍するアーティストから地域の市民団体まで、多様な芸術の担い手と交流し、芸術の過去と未来を考えるたくさんのヒントを頂いています。

Q&A

学部時代の専門は芸術がテーマではないのですが？

芸術文化の研究もまた歴史や現代社会のさまざまな事象につながるものですから、学部時代の勉強を生かしてテーマ設定をすることは可能です。また博士前期課程では、自分の関心あるテーマだけではなく、いろいろな作品にできるだけ幅広く触れてほしいと考えています。

語学力は必要でしょうか。

研究する際に必要になる考え方の多くが欧米の研究を基礎としていることもあり、英語を知っていることは研究の大きな助けになります。また、芸術文化は言語と密接な関係にありますので、すくなくとも入学後には研究対象と関係する語学を学習してほしいと思います。

言語コミュニケーションコース



「ことば」は概念やメッセージを相手に伝える単なるコミュニケーションの手段であるだけでなく、人間の認知・思考・習慣とも密接に関わる文化そのものともいえます。本コースでは言語構造や言語慣用に関する比較・対照分析を基に、外国人に対する有効な日本語教授法の探求、第二言語習得や翻訳・通訳における言語的・文化的分析と方法論の開発、多種多様なレトリックの比較分析などを進め、グローバル化の進展の中で今や不可欠になりつつある異文化間コミュニケーション上の諸問題の解決に積極的に取り組んでいます。基礎から応用に至る、言語コミュニケーションに関わる様々な講義・演習を通して、実践的応用能力あるいは教育・研究能力を持つ人材の養成を目指しています。

進路実績 (前期課程) 東京都立高等学校(英語教員)、大阪府立高等学校(英語教員)、兵庫県公立中学校(英語教員)、(株)資生堂、(株)シャープ、アップ教育企画、日本放送協会、JR西日本関連会社、特許事務所、他
(後期課程) 天津外国語大学准教授、中国電子科技大学准教授、関西学院大学准教授、東京大学特任講師、他

在籍学生数 (前期課程) 14名
(後期課程) 6名

論文テーマ例 (前期課程) バイリンガリズム、タイ語のモダリティ、日・仏語のフィラー、カタカナ表記語の社会言語学的研究、レトリック、説得、マンガのオノマトベ翻訳、日本語教育の社会的側面、日本語学習とオノマトベ、日本語の接続詞、他
(後期課程) 第二言語の形態統語の習得、複合動詞、日中同形漢語、フィクションのレトリック、物語論、ベトナムにおける日本文学翻訳、イデオロギーと翻訳、字幕翻訳、日本語教育の歴史、他

所属教員の紹介

ALBIN, Aaron 講師 比較・対照言語論特殊講義ほか

主に第二言語におけるイントネーションの習得を研究しています。その一環として、母語と対象言語のイントネーションの音韻構造を比較対照する必要があります。担当授業では一般言語学とその方法論(仮説検証や計量的手法など)について紹介します。原則として英語のみで授業を行います。

川上 尚恵 講師 日本語教育応用論特殊講義ほか

中国や日本国内を対象とした日本語教育史研究を主にしています。学習/教育に関わる人々の実践や日本語教育の枠組みを史的な観点から分析することで、日本語教育の社会的意義や役割、あり方を問いたいと思っています。日本語教育の実践分野に関する研究も視野に入れており、特にノンネイティブの日本語教師養成について関心があります。

小松原 哲太 講師 レトリカル・コミュニケーション論特殊講義ほか

言葉の意味を効果的に表現するレトリックを、意味論、文法論、語用論を中心とした言語学の立場から研究しています。意味を理解し、ときに誤解する、私たち言語使用者の柔軟な解釈を重視する、認知言語学の理論を背景として、具体的な用例の収集、記述、分析にもとづく、言語のコミュニケーション機能の探求を行っています。

齊藤 美穂 准教授 日本語教育方法論特殊講義ほか

方言を含む現代日本語の文法を中心に研究をしています。また、外国人に対する日本語教育に携わってきたこともあり、日本語教育分野全般、特に外国人児童生徒に対する教育に関心を持っています。今後は、文法の研究を中心しつつ、その成果を活かした日本語教材の開発や教授法の研究にも力を入れていきたいと思っています。

田中 順子 教授 第二言語習得論特殊講義ほか

第二言語習得(SLA)プロセスにおけるアウトプットとフィードバックの役割や、個人差(言語学習適性など)がSLAに及ぼす影響について研究をしています。また、第一言語(L1)には存在しない第二言語(L2)概念が、どのような過程で正しく(あるいは誤って)区分されてL2形態にマッピングされるのかに関心があります。SLAのみならず、教室内での外国語学習やマルチリンガル環境下での言語習得とその問題点も扱っています。

朴 秀娟 講師 日本語教育内容論特殊講義ほか

記述的研究の立場から、主に現代日本語を対象とした文法研究を行っています。留学生に対する日本語教育に携わっていることから、日本語教育や対照言語学の視点を取り入れた文法研究も行っています。特に、副詞に関心を持っており、副詞の意味・用法やその変化に関する研究、日本語教育における副詞の研究を中心に行っています。

藤濤 文子 教授 翻訳行為論特殊講義ほか

翻訳行為を異文化間コミュニケーションとして捉える機能主義的一般理論と、それを具体的な翻訳行為と翻訳事例(主に日独英語間)にどう応用するかがテーマです。翻訳において文化の差異をどう乗り越えて伝えるか、また受容者・メディア・目的などの要因が翻訳行為にどのような影響を及ぼすかに興味があります。

所属学生からのメッセージ



小前 勇悟さん

(博士前期課程 2年)
神戸大学国際文化学部卒業。
研究テーマ:「日本人英語学習者の英語の未来表現の理解について」

私は学部生の時に英語教員を志し、教職課程を取ったのですが、教育実習などを通して、なにごれからのグローバル人材に求められている、日本の英語教育はどこをゴールにして行っていくべきかということや、どのような教授法が現代の子どもたちに適しているのかということについて考えさせられました。それと同時に、自分の英語教育に関する知識不足や能力不足を感じました。そこで、英語教員になるにあたって、より専門的な知識の獲得や英語圏への留学を希望し、大学院進学を決めました。

一口に英語教育に関する専門知識といっても、もちろんそれは文法に関するものだけでなく、音声に関するものや文化に関するもの、また日本語に関する知識や英語教育の変遷や現状、方法論なども含み、多岐にわたります。英語教育という観点だけでこれだけのものが挙げられるわけですから、「言語」は非常に多くの要素と関わっていることが分かります。本コースの授業は、「言語」に関する様々な内容が展開されており、自分の専攻分野以外の知識も身につけることが出来ます。授業では、授業で学んだ理論などに関する議論や発表が積極的になされており、自分の意見を伝える力や思考力、発想力が向上すると思います。授業だけでなく、学生主体で運営を行っており、気軽に意見交換ができるTaLCSと呼ばれる研究会も設けられており、研究の進め方に不安を持っている人や他学生との交流を希望している人の助けになると思います。また、研究室の雰囲気も和やかで、留学生も多いため、日々の交流を通して多様な分野や価値観に触れることができ、爽やかな大学院生活を送ることが出来ると思います。



朱 諒琳さん

(博士後期課程 3年)
広東工業大学日本語学部卒業。博士前期課程の研究テーマは「中国の日系企業における翻訳者の規範意識-異文化コミュニケーションとしての通訳・翻訳行為を中心に-」。

大学卒業後、中国の日系企業に翻訳・通訳者として入社し仕事をしてきました。そこで私は翻訳・通訳の現場における異文化コミュニケーションの問題に直面し、その解決策を探る中でトランスレーション・スタディーズに出会いました。翻訳研究という学問の世界は幅広く、言語学や社会学など様々な分野と関連し、文学翻訳やビジネス翻訳、通訳などすべてのジャンルを包括した実際の翻訳・通訳行為に深くかかわるものだと考えています。そのような学問と出会い、「さらに勉強したい」、「翻訳研究をもっと多くの人に紹介したい」という目的をもって留学を決意しました。そして、博士前期課程においてはビジネスジャンルを中心に、「翻訳規範」という概念モデルを用いて記述的な研究を試みました。博士後期課程では引き続き前期課程の研究結果に基づいて、理論と現実の調和を目指した応用面の研究を行っています。

言語コミュニケーションコースでは、翻訳行為論以外に、日本語教育学、第二言語習得論、レトリカル論など様々な授業が開講されており、授業で理論を学びながらほかの院生たちと議論を交わし、多くのことを学ぶことができます。また、日本語教師サポコースを履修したことで、他コースの方々とも意見をシェアしたり、ペアで模擬授業をしたりすることができました。これらの体験は私の視野を広げることにつながりました。さらに、授業のみならず、院生研究室でも交流の機会がたくさんあり、各自の言語や文化などについて話し、「カルチャーショック」を受けることも大きな楽しみです。

この3年間、先生方のご指導をいただき、また同じコースの院生たちと気兼ねなく質問・指摘し合いながら、楽しく有益な日々を過ごしてきました。これからも、今まで学んだ知識と議論で得られた視点を研究に反映させ、互いに助け合いながら努力していきたいと思っています。

修了学生からのメッセージ



牟 鵬程さん

(2018年度博士前期課程修了・研究者養成プログラム)
西南交通大学日本語学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。
研究テーマは「中国人留学生の達成戦略-使用とL2日本語熟達度との関係について」。
現在、北京第二外国语学院成都附属中学校英語教師。

私は大学四年生のとき、交換留学プログラムのおかげで来日しました。来日してから、自分や周りの留学生と日本語母語話者との間の会話に注意を払うようになり、我々はどうのような戦略で日本語母語話者との意味伝達上の問題を解決しているのかに関心を持ちました。そこで、大学院に進学し、コミュニケーション・ストラテジーに関する研究を始めたのです。国際文化学研究所に進学し、人生のルールや正しい礼儀などについて指導教員に教えられ、これからの人生の宝物になると思いました。また、構想発表会、研究会TaLCS、中間発表会で本コースの多くの先生方から貴重な意見を頂き、自分の研究にとって大変役に立ちました。ここで、再び先生方に感謝の気持ちを表したいと思います。

多様な授業科目が開講されていることと様々な研究方向を持つ先生が集まるのが国際文化学研究所の一番大きな魅力です。私は大学院の授業で第二言語習得、日本語教育の講義から日本語模擬授業の実践にまで至り、さらには本コース以外の授業科目も履修し、言語だけでなく、芸術、歴史、統計など様々な科目で有意義な大学院の授業を楽しみ、多様な角度から研究や人生を考えることができました。

最後に、中国のある有名な詩を皆さんに送りたいと思います。「长风破浪会有时，直挂云帆济沧海」(長風が荒波を突き破る時はきっと来る、船に帆を揚げてこの海原を渡らん)



藤原 優美さん

(2013年度博士後期課程修了)
四川外国语学院日本語学部卒業。神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程・博士後期課程修了。
研究テーマは「日本語のS変動詞とそれに対応する中国語の対照研究: 語構成の異同と文法的振る舞いを中心に」。
東京大学教養学部付属グローバルコミュニケーション研究センターの専任講師として採用され、現在広島市立大学専任講師。

外国語を学習する際、母語の知識が活用できれば、習得を促進することがあります。これは日本語や中国語においても同じです。日本語と中国語の中には、同形漢語が多数存在しているため、中国語母語話者が日本語に接した際にも日本語母語話者が中国語に接した際にも、漢語に親しみを感じると思います。在学中、私は日本語と中国語の対照研究、特に2字同形漢語について研究を進めました。ゼミでは、研究指導や報告などを通した議論が行われ、国内外の研究調査や学会報告なども先生方がフォローしてくださいました。私も指導の先生をはじめ、コース内の先生方からきめ細かなご指導をいただき、また生活面でも親切に相談に乗っていただきました。院生室では、毎日異文化コミュニケーションが体験できます。先輩方も同級生の仲間たちも仲がよく、助け合いながら一緒に歩んできました。

このように、私は実りある豊かな大学院生活を送ることができました。国文言コミで過ごした5年間は私にとって、大切な思い出です。皆さんもぜひここで自らの夢に向かって頑張ってください。皆さんが充実した楽しい学生生活を送れることを願っています。

Q&A

言語コミュニケーションコースの授業の特徴としてどのようなことが挙げられますか？

本コースの教員は、留学生に対する日本語教育や日本人に対する外国語教育について豊富な経験をもっています。したがって、教育経験に基づく疑問点・問題点が絶えず授業の中心にあり、問題解決を念頭においた授業を行なっています。

本コースではどのようにして修士論文や博士論文のテーマが決められているのでしょうか？

本コースでは、入学してきた学生の問題意識や関心・興味を第一に考えています。したがって院生は、指導教員と相談しながら自らテーマを決めることになります。

指導教員にしか論文指導をしてもらえないのでしょうか？

例えば前期課程では1年次後期から2年次後期にかけて、計3回程度コースの教員・院生の前で修士論文・修了研究レポートの中間発表をする機会を設けています。つまり、修士論文・修了研究レポートの作成をコース全体でサポートする体制をとっています。

感性コミュニケーションコース



人とひとの間のコミュニケーションにおいて要求されることの一つは、気持ちが通じあうことでしょう。しかし実際のコミュニケーション場面においては、たとえば「言葉は通じているのに気持ちが通じていない」と思える場合があります。この場合、「気持ちは通じていないか」「言葉（音声）は本当に通じているか」といった基本的な問題について検討する必要があります。感性コミュニケーションコースは、コミュニケーションの過程を音声生成など身体的なプロセス、心理学・脳科学など認知的なプロセスの水準から探求します。またネイティブの発音に近い発音を可能にする方策、対人関係を改善する技法といったプラクティカルな問題についても学生諸君と一緒に研究を行っています。

進路実績 (前期課程) ユニクロ、アステラス製薬、イーオン、ATR Learning Technology、(中国の国立)中国銀行、神戸市(上級行政職)、航空大学校、島津製作所(上海)
(後期課程) 神奈川県科学捜査研究所、大阪大学言語文化研究科、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、日本学術振興会特別研究員(PD)、武漢大学パナソニック、京都精華大学、情報通信研究機構(NICT)

在籍学生数 (前期課程) 6名
(後期課程) 3名

論文テーマ例 (前期課程) 注意、ワーキングメモリ、情動、視覚認知、表情、音声コミュニケーション、外国語発音における母語干渉、エラーニング、社会性、音楽的コミュニケーション、マルチモーダル分析
(後期課程) 数表象、プライミング、視覚的注意、外国語音声習得のメカニズム、音声の産出と知覚、ボライトネス

所属教員の紹介

林 良子 教授 言語行動科学論特殊講義ほか

音声科学・心理言語学。日本語や諸外国語における音声の特徴や、外国語を学ぶときの発音の困難点などについて実験的手法を用いて研究しています。言語障害や言語発達、各国における音声コミュニケーションの教育方法の比較についても興味があります。

米谷 淳 教授 対人行動論特殊講義ほか

対人コミュニケーション・実験心理学。対人相互作用はジレンマとパンドックスの宝庫であり、誤解、誤情報、意思不通、不信・不審がキーワードです。こじれやすく、扱いにくく、かといって軽視できない対人コミュニケーションの世界を主に行動科学的アプローチにより探ってみませんか。対人技能訓練、表情と感情の文化比較の研究に取り組んでいます。

松本 絵理子 教授 コミュニケーション認知論特殊講義ほか

認知心理学、認知神経科学。人間の知覚、行動、記憶、注意といった認知活動について、心理実験や脳活動計測などの手法を用いて研究しています。特に、注意について、不安やストレスなどの個人特性が及ぼす影響や、どうして表情や恐怖の対象には注意が素早く向けられるのか、等について関心があります。コミュニケーションの背景にある人間の行動や認識の傾向を認知心理学的というのぞき窓を通じて探ってみませんか。

巽 智子 講師 コミュニケーション文法論特殊講義ほか

第一言語習得、心理言語学。私たちはどのように言語を習得するのか、を中心のテーマとして研究をしています。また、言語変化、発達語用論、コミュニケーションと言語の関係など色々なテーマに関心があります。実験やコーパスデータの分析を通じて言語を探る、活発な研究の場を創りたいと考えています。

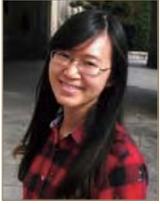
正田 悠 助教 非言語コミュニケーション論特殊講義ほか

演奏科学・感性情報心理学。人間の複雑なインタラクションに関する「心理」、「行動」、「生理」の3種の時系列データを取得し可視化することによって、人のコミュニケーションにおける感性情報の役割を調べています。具体的なテーマとして、音楽演奏における演奏者と鑑賞者の間のダイナミクスや対人コミュニケーションにおけるマルチモーダル性(言語情報と非言語情報の相互作用)に取り組んでいます。

南本 徹 助教 言語インターフェース論特殊講義ほか

言語学、歴史言語学、印欧語研究、古代ギリシア語研究。主に古代ギリシア語の方言を研究しています。古代ギリシア人はそれぞれ地元の方言を使っていたので、各地の碑文を比べるとそれぞれの方言の特徴や歴史的背景を探ることができます。その他、「人間の言語はどれくらい多様であり得るのか」にも興味があり、少しずつ日本手話を勉強しています。

所属学生からのメッセージ



李 歆玥さん

(博士後期課程 3 年生)
大連外国語大学日本語学部卒業。
同大学大学院日本語言語学研究所博士前期課程修了。
研究テーマは「感情音声の生成と知覚——日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者を対象に——」

私は、感情音声に関心があり、学習者と母語話者での違いを知りたいと思い本コースへの入学を決めました。研究の壁にぶつかるたびに、音声学の先生からの心強い指導のみならず、心理学や教育学の先生からも別の視点からのご指導をいただきながら、自身の研究テーマを見直しています。それと同時に、異なる研究分野を超えて、院生同士で研究について語り会えるのはお互いの研究への刺激となり、考えを深めていく上でも大変貴重だと実感しています。

このように、本コースの魅力は言語、バラ言語、非言語行動の境界を超えて、多角的な視点から深く学べるよう研究環境が整っていることです。その上、本大学は多数の海外大学と協定を結んでおり、院生でも留学できるチャンスを得られることも魅力的です。このような環境でこれからも感性コースで一歩ずつ研究を進めるよう頑張っていこうと思います。



轟 夢叶さん

(博士前期課程 2 年生)
河北大学日本語学部卒業
研究テーマは「孤独感高い大学生の社会的スキルの特徴——中国の大学生と日本の大学生を対象に——」

私は2年前に留学のために中国から日本に来ました。対人コミュニケーションに興味があったので感性コミュニケーションコースに進学しました。最初は専門知識や日本語能力がまだ十分でなくいろいろ苦労しましたが、先生方に丁寧に指導していただきました。現在、日本人と中国人の非言語コミュニケーションに関する比較研究をしています。

感性コミュニケーションコースでは、心理学だけでなく脳科学や言語学も勉強することができます。また、統計学や情報科学などいろいろな分野のゼミに参加する機会があり、研究に大いに役立っています。

研究室に中国人が多く、いろいろなサポートを受け、院生としての生活にすぐ慣れることができました。また、いつも先輩や友達と話し合っただけで研究や生活に関する悩みを相談して、明るい学生生活を送っています。貴重な留学生活なので、毎日頑張ってたくさんの知識や能力を身に付けようと思っています。

修了学生からのメッセージ



宿利 由希子さん

(2018 年度博士後期課程修了)
群馬大学社会情報学部卒業。東北大学文学研究科博士前期課程修了。神戸大学大学院国際文化学研究所博士後期課程修了。研究テーマは「行為者のキャラに着目したポライネス研究」。現在、京都精華大学特任講師。

韓国、香港、ロシアなどで日本語教育に携わってきました。非母語話者である日本語学習者が、教室で学んだ日本語を完璧に話しても、日本語母語話者が「何その言い方!」「失礼な!」と不機嫌になる場面に何度も遭遇し、なんとかしなければと神戸大学国際文化学研究所受験を決意しました。博士論文では、発信者がどのような「キャラ (人物像)」かによって、受信者の評価が異なることを示すことができ、これまでの画一的な日本語教育の限界を指摘できたと感じています。

博士課程は、非常勤で日本語を教えながらという二足の草鞋の3年間でした。心配はありましたが、先生方のご指導や (年下の) 先輩方のご助言のおかげで、博士論文を書き上げることができました。感性コースでは、さまざまなご専門の先生方から多角的なご指摘をいただき、大変鍛えられました。

大学、特に博士課程は自分で学ぶところだと私は思っています。どんどん学会で発表し、ばんばん論文を投稿して、研究を進めていくください。



川島 朋也さん

(2018 年度博士後期課程修了)
神戸大学国際文化学部卒業。神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了。神戸大学大学院国際文化学研究所博士後期課程修了。研究テーマは「注意制御機構の認知神経科学的研究」。現在、情報通信研究機構脳情報通信研究センター研究員。

ヒトがどのようにものを見たり記憶したりしているのかに興味があり、この感性コースに進学しました。ヒトの注意や記憶などは目に見えないものですが、心理実験や脳機能計測によってそのところの活動に迫ることができます。本コースにはそのための行動実験室や脳波計測室などの充実した設備があります。また、ヒトを対象とした研究では、専門的な知識だけでなく、その周辺領域を含めた幅広い知識が必要です。その中で本コースは、さまざまな領域の先生から指導を受ける環境にあり、一つの学問領域に閉じこもることなく広く諸領域から自身の研究を見直すことができます。

本コースにはさまざまな国や地域からの学生が集まります。多文化なバックグラウンドをもつ学生同士の交流は、自身の視野をいっそう広げてくれます。感性コースにご関心のある方は、研究室の訪問だけでなく、ぜひ院生室にもお越しください。

Q&A

感性コミュニケーションに入るには、心理学や脳科学と、言語学、コミュニケーション論などを全部勉強していないと、ダメなのでしょうか。

そんなことはありません。とりあえず、どれか、で結構です。

言語について研究したいと思っているのですが、このコースと言語コミュニケーションコースはどう違うのですか？

感性コミュニケーションでの言語研究は、自然に発話されたデータや、様々な機器を使って実験的に計測を行ったデータを主に扱います。またバラ言語と言われるいわゆる伝統的な言語学ではあまり扱われてこなかった分野 (例えばため息、沈黙、声の

音色など) や視覚情報 (目線、表情、口の形、ジェスチャーなど) も含めて研究したいという方、実験して色々測ってみようという方には当コースをお勧めします。

脳の研究をやりたいのですが、どんなことが可能ですか？

感性コースでは、脳波計、光トポグラフィーを使って脳機能計測実験を行うことができます。もちろん、精密に計画して組んだ心理学実験によって、認知情報処理が脳内でどのように行われているかを検討することも可能です。チャレンジをお待ちしています！

情報コミュニケーションコース



情報コミュニケーションコースは、コンピュータやインターネットに代表される、情報通信技術を用いたコミュニケーションについての教育・研究を行うコースです。当コースでは、インターネットにおける最新の情報発信技術、コンピュータを用いたコミュニケーション情報の収集・分析・整理方法といった、すぐに活用できる高度な情報処理技能の習得や、将来におけるより効果的なコミュニケーションの実現を目的とした情報通信技術の研究・開発を行なっています。

就職実績 (前期課程) チームラボ株式会社、日本電気株式会社、西日本電信電話株式会社、滋賀県立成人病センター職員、コベルコシステム株式会社、スミセイ情報システム株式会社、富士通FIP、東京農工大学職員、神戸情報大学院大学准教授、富士通ピー・エス・シー、神戸情報大学院大学職員、グッドスカイ(株)、中国電信北京支社、中国広発銀行、野村総研、アクセンチュア

(後期課程) 立命館大学情報理工学部講師、神戸情報大学院大学助手、神戸女子大学助教、大阪産業大学講師、北九州市立大学准教授、大妻女子大学短期大学部准教授、中国国家核工エンジニア、台湾実践大学講師、廈門理工学院講師、関西学院大学理工学部研究員、神戸大学医学部附属病院IMCC特任助教、株式会社NTTデータ技術開発本部研究開発職

在籍学生数 (前期課程) 8名
(後期課程) 3名

論文テーマ例 情報科目学習形態分析、文書の自動分類、XML検索法、IT技術者向け学習システム、外国語学習システムにおける誤りレベル判定機能、記憶の仕組みを活用した学習システム、質問支援システム、コミュニケーション指向の都市評価、逆引オノマトベ辞典、ユーザインタフェース、コミュニケーション支援、ニューラルネットワークによるコンピュータ「錯視体験」

所属教員の紹介

大月 一弘 教授 コンピューター・コミュニケーション・システム論特殊講義ほか

情報通信システムに関する研究をしています。阪神・淡路大震災において情報を持ち使う側の視点と情報伝達システムを構築する側の視点との間に、ある種のギャップがあることを痛感し、「使う側の人の目・現場の目」を重視するようになりました。

康 敏 教授 コンピューター・シミュレーション論特殊講義ほか

情報通信技術の情報教育及び外国語教育への応用に関してコミュニケーションの視点から研究・開発を行っています。特に統計的アプローチを用いてユーザのニーズにあった情報を提供することとユーザの特徴を抽出することに焦点を当てています。

清光 英成 准教授 情報ベース論特殊講義ほか

データベースシステムやWeb情報システムを用いてデータを高次利用することを目的としています。アクセス履歴などの利用者プロフィールや場所・時間などの状況を参考に「いつもの」という入力に利用者個別の答えを出力することをテーマにしています。

西田 健志 准教授 計算科学応用論特殊講義ほか

情報システムの操作性を向上するユーザインタフェースの研究、人どうしのやり取りを円滑にするコミュニケーションシステムの研究をしています。特に、意見がまとまらない、批判的な意見が言い出せない、外国語が流暢でないなど、コミュニケーションがうまくいかない状況を情報と心理の両面から見つめ直すこと、開発したシステムを実際に運用して知見を得ることを重視しています。

村尾 元 教授 認知情報システム論特殊講義ほか

生物に倣った「柔らかい情報処理」の技術を用いて、人間をはじめとする生物の集団に現れる知的な振る舞いの分析と応用について研究をしています。対象となるのは、人間などの個体が構成する小さな集団から、社会、経済、インターネットまで様々です。
キーワード：社会システム科学、機械学習、データサイエンス

森下 淳也 教授 メディア統合論特殊講義ほか

研究対象は情報を蓄え、活用するためのデータベースシステムです。しかし、「堅牢な、正しい、シンプル、完全な」といったデータベースの持つ大きな特性に逆らい、「曖昧、複雑、柔らかい、不完全(成長する余地がある)」といったデータを扱う「やわらかな」データベースシステムを構築しています。

所属学生からのメッセージ

前川 絵吏さん

(博士前期課程 2年)

徳島大学工学部卒業

研究テーマは「ニューラルネットワークを用いたやさしい日本語の自動生成（テキスト平易化）」



私が興味を持っているのは、ニューラル機械翻訳を用いたテキスト平易化に関する研究です。日本語学習者が新聞やニュース記事を読むと、知らない言葉や表現があつて理解できないことがあります。そのため、難しい文章をやさしい文章に書き換えて提供するサービスがありますが、そのほとんどが人の手で書き換えたものです。ニューラル機械翻訳を使ってその書き換えを自動化することが、私の研究のテーマです。

日本語はデータセットが少ないため、外国語（特に英語）と比べると、言語を扱う情報技術は発展が遅いと感じます。しかし、

本研究科には言語学や日本語教育を研究しているコースもあるので、日本語を扱う自然言語処理を学ぶには理想的だと考え、入学を希望しました。

入学から現在までの期間に、テキストマイニングによってデータ分析をしたり、文書生成プログラムを作ったりしました。プログラミングは経験がありましたが、機械学習のプログラムを作ったのは入学してからです。自然言語処理に関する知識もほとんど大学院に入学してから習得しました。自然言語処理やディープラーニングは近年めまぐるしく発展しており、新しい論文を理解するだけでも大変です。新しい技術が何に活用できるのか、自分の研究にどう繋がるのかを常に考えています。

私は入学前から教育に関わる仕事に就いて、現在も仕事量を調整しながら研究を進めています。なかなか研究が進まないこともあります。研究室の学生や、先生方の熱心な指導を受けて、充実した日々を過ごしています。



川田 恵さん

(博士後期課程 2年)

神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了

研究テーマは「非言語情報を用いたコミュニケーション拡張に関する研究」

学部時代から情報分野に関心があり、プログラミングや画像処理、映像処理などを主に学んでいました。大学4年生の時に、情報についてもっと専門的な知識を身に付けたいと考え、神戸大学の国際文化学研究所情報コミュニケーションコースへの入学を希望しました。

本コースには、研究科案内に掲載されているように様々な研究分野が設けられています。そのため、理系と文系といったはっきりした境界がなく、両方の視点から研究を行うことができます。自分の興味がある研究に加えて、様々な視点から研究について考えることができる、これが本コースの魅力だと思います。

また、学会や国際交流を通して国内外問わず様々な研究者や先生方と交流することができ、これらに積極的に参加することで、世界の人々と自分の研究に関して意見交換を行うことができます。私が所属する研究室では家族のような雰囲気、先生からも先輩からも熱心なサポートを受けることができます。すでに就職された先輩方や、同じ研究室の仲間には日々刺激を受けています。

大学院に進学するという事は、専門的な知識を身につけること、自分の研究テーマを遂行することが大事ですが、自分の世界を広げる機会がたくさんあります。一緒に世界に羽ばたかせよう。大学院に進学する皆様をお待ちしております。

修了学生からのメッセージ

謝 涵さん

(2017年度博士前期課程修了)

研究テーマ：「物語の登場人物を把握しやすくする読書支援システム」

現在、シンプレクス株式会社勤務。



私は学部生の頃に、外国語学部に所属し、日本語を専攻しました。もともと情報通信分野に興味を持っていましたので、このコースの紹介や先生たちの論文を読んで、この分野に挑戦したいと思い、大学院に進学しました。博士前期課程修了後、金融システム開発の会社でシステムエンジニアとして働き、システムデザインと実装開発の仕事を中心に担当しています。現場で院生の時に勉強したIT知識とものづくりの経験を生かしています。

本コースでは、自分が今まで勉強してきたことだけでなく自分が興味を持つテーマについて研究することができます。講義で情報に関する様々な研究分野を知り、視野を広げられ、新たな目線で周りの世界を観察することができます。また、グループで一緒にアイデアを出して、ものづくりの楽しさも味わえます。研究については、アイデアと研究目的を重視し、情報の力で身の回りのコミュニケーション問題を解決していきます。先生たちは学生のアイデアを尊重し、しっかりサポートしてくれます。文系と理系という境界ははっきりしてなく、両方の知識を用いて研究することが情報コミュニケーションコースの魅力だと思います。

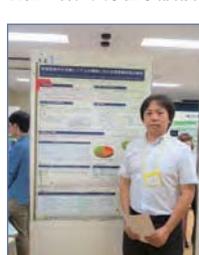
大学院に進学することで、専門性の高い授業も受けることができますし、学会発表などの経験でグローバルな視野を身に付けることもできます。本コースに興味ある方は、ぜひ挑戦してみてください。

川村 晃市さん

(2019年度博士後期課程修了)

同志社大学文学部卒業、南カリフォルニア大学大学院教育学研究科修士課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究所博士後期課程修了。

現在、神戸大学医学部附属病院特命助教。



情報コミュニケーションコースへの進学を希望する方のもっとも知りたいことは、「情報通信系の専門知識がなくてもついていけるのか」ということだと思います。個人的な意見になりますが、この問いに対する私の答えは「やる気次第です」です。もちろん、プログラミングなどの専門知識があるに越したことはないですが、専門知識より主体的に研究する意欲があることが重要だと思います。私自身、私立文系学部出身ですがついていくことができました。

次に知りたいことは「情報コミュニケーションコースはどのような雰囲気なのか」ということかだと思います。こちらも個人的な意見になりますが、「自由です」です。研究に関して、先生方は院生の考えを尊重して下さいますし、いろいろな挑戦を許容していただけます。いわゆる、押し付けや強要とは無縁です。私も指導教官に自主性を尊重していただけたことで研究のやりがいと面白さを知ることができ、充実した研究生活を送ることができました。

最後に、当コースの特徴を書いておきます。情報コミュニケーションコースには様々なバックグラウンドを持った学生が在籍しており、互いに切磋琢磨できる環境があります。また、コースの性質上、情報機器が充実しておりシステムの開発環境もあります。特に強調したいこととしては、先生方と院生の距離が非常に近く、研究意欲のある院生に対しては熱心にご指導していただける研究環境があることです。

Q&A

大学では情報や通信の専門的な勉強はしてきていないのですが、大丈夫でしょうか？

当コースを選ぶにあたっては、必ずしも、理工系の情報通信を専門とする必要はありません。高度な情報通信技術を学び、それらを自分の専門分野に生かそうという意欲をもった院生を歓迎します。

数学が苦手なのですが、ついていけるでしょうか？

当コースでは、最先端技術をより高めていくような技術革新といった研究ではなく、既存の技術がどのように使われるのか、また、より良い使い方はないのかといった応用面での研究を行なっています。仕組みを理解しその仕組みを工夫する事でどのような新しい活用ができるかを模索するには、より広い意味での理解力は求められますが、高度な数学を駆使することはほとんどありません。

外国語教育システム論コース



外国語教育システム論では、英語を中心とする外国語教育の基礎を担う言語学、心理学、言語表象作品分析など様々な領域の学際的知見を援用して研究を行い、それらを有機的・総合的に連関させることで、外国語教育のシステムの研究・実践にあたることのできる有為の人材養成を行う。

本教育研究分野では、特に、

1. 言語学、心理学など関連諸分野の知見に基づく学際的な言語教育研究
2. 幅広い言語文化・表象作品の言語教授法への応用と方法論研究
3. IT教育など言語教育環境整備に関わる実践的研究
4. 言語習得、言語使用を取り巻く社会的・文化的要因に関わる研究
5. 心理言語学的研究により得られた知見の教育現場への応用
6. 教育現場における指導実習等の活動支援

を重視して研究指導を行っている。

所属教員の紹介

島津 厚久 教授 言語文化表象論特殊講義ほか

アメリカ現代文学。中でもユダヤ系アメリカ文学で、特に小説家バーナード・マラマッドの長・短編小説を「表現」の観点から読み解こうと試んでいます。

高橋 康徳 准教授 言語対照基礎論特殊講義ほか

中国語学、音声学、音韻論。中国語諸方言の声調に関する現象を音声学・音韻論の観点から研究しています。

濱田 真由 助教 言語教育環境論特殊講義ほか

心理言語学、外国語教育。第二言語・外国語での言語処理時のプロセスについて検証し、得られた知見を外国語教育にどのように応用することができるのかについて検討しています。

廣田 大地 准教授 言語文化環境論特殊講義Ⅰほか

フランス文学。ボードレールを中心とした近代フランス詩を研究対象とし、その詩学を言語学的観点から記述することを目標としています。他にも WEB やコンピュータを用いた文学研究・語学教育に関心があります。

進路実績 (前期課程) 千葉県私立高等学校、大阪府立高等学校、神奈川県立高等学校、他
(後期課程) 兵庫教育大学、神戸学院大学、近畿大学、自然科学研究機構、神戸市工業高等専門学校、立命館大学、桃山学院大学、他

在籍学生数 (前期課程) 4名
(後期課程) 6名

論文テーマ例 (前期課程) Time-course effects of vowel epenthesis on novel word learning and the establishment of lexical representation
The effects of retelling on Japanese EFL's text comprehension: Through the analysis of retelling protocol
Variability of the parsing process in relative clause sentence comprehension for Japanese EFL learners: A maze task study
A study of English loan words in Korean and Japanese
(後期課程) An investigation of the automaticity in parsing for Japanese EFL learners: Examining from psycholinguistic and neurophysiological perspectives
The automatization of grammatical encoding process during oral sentence production by Japanese EFL learners: A syntactic priming study
The role of exposure to syntactic structures and discourse-driven syntactic processing in Japanese EFL learners' text comprehension

保田 幸子 教授 言語科学論特殊講義ほか

第二言語習得論、第二言語ライティング、ジャンル分析、カリキュラム開発。「第二言語で書く」という行為をめぐる、書き手の方略やジャンル意識、言語的・文体的特徴に焦点を当てた研究を行っています。これらが長期的にどのように変化するか、なぜ変化するかという発達プロセスを明らかにすることが研究テーマです。

安田 麗 講師 言語文化環境論特殊講義Ⅱほか

音声学、ドイツ語教育。外国語の音声習得、発音指導に関して、音声学的観点よりドイツ語、日本語を含む様々な言語を対照しながら研究しています。

横川 博一 教授 言語教育科学論特殊講義ほか

英語教育学・心理言語学。第一言語および第二言語のリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングおよび語彙の認知処理メカニズムとその授業実践への応用可能性を探ることが主な研究テーマです。

所属学生からのメッセージ



謝 展眉さん

(博士後期課程 2年)

神戸市外国語大学外国語学研究所博士前期課程修了。
研究テーマ：「中国人日本語学習者の文産出プロセスにおける概念接近度の影響」

学部では日本語を専攻していたため、日本語学習者として中国人を対象とした日本語教育に一貫して関心を持っています。単語や文法や談話構造など様々な側面から外国語を学んできた私たちがなぜ、日本語を運用するとき、特に口頭産出の際に依然としてエラーを多く起こしてしまうのかという問題についてとても興味があります。そこで、言語知識の運用と外国語教育の関係をより深く調査するため、理論研究と教育実践を融合することを重視した本コースを選びました。

現在、中国人日本語学習者の日本語の文産出における統語表象構築プロセスおよび言語処理のメカニズムを解明することをテーマとして、心理言語学的手法を用いて研究しています。博士後期課程に入学してからのこの一年間、本コースで多くの新しい経験を積むことができました。ゼミでは、先行研究についての討論をしながら理論的知識を固めるほか、学生各自の研究内容を巡る検討も行っています。先生の丁寧なご指導と同じ研究室の学生からのコメントのおかげで、自分の研究に対する理解を深め、研究内容を日々修正していくことができました。また、本コースで定期的実施される集団指導で、多岐にわたる専門分野の先生方からも多角的に実験内容と実験手法を改善できるような、貴重な助言をいただき、計画的に研究を遂行することもできました。さらに、多くの先生方と院生たちの前で発表し、質疑応答を行うことを通じて、プレゼンテーションのスキルが鍛えられたことは、学会発表にも役立つとても大切な経験となりました。

今後は日本語教師になることを目標として学習者の日本語運用力を高める方法を探り続け、大学院で得た知見と自分の研究成果を生かし、日本語教育に貢献できるように努力していきたいと思っています。



倉橋 祐輔さん

(博士前期課程 2年)

神戸市外国語大学外国語学部第2部英米学科卒業。
研究テーマ：「日本人大学生の英語ライティング能力に関する実態調査～結束性と評価の関係に焦点を当てて～」

私は学部生の時に教職課程を履修していましたが、所属していた学部が教育学部ではなかったこともあり、外国語教育についての知識が十分に身につけているとは言えないのではないかと感じていました。そのため、大学院に進学し、外国語教育についてより広く、またより深く学びたいと思い、外国語教育システム論コースに進学しました。

本コースでは、英語教育に限らず、広く外国語教育について学ぶことが可能です。所属する院生のバックグラウンドも様々であり、英語以外の言語の教師や研究者を目指される方もいらっしゃいます。そのような環境で学ぶことは、新たな気づきを得ることにもつながるものと思います。

また、本コースでは、年に数回、集団指導演習の機会があります。集団指導演習では、それぞれの院生が所属するゼミで進めてきた自身の研究について発表します。発表後にはコース所属の先生方や院生からアドバイスをいただけます。多様な視点からのアドバイスをいただくことによって、院生は自身の研究をより良いものにしていくことができます。

現在、私は外国語の4技能の中で最も関心があったライティングについて研究をしています。特に「結束性」に焦点を当て、読み手が理解しやすい文章を書くために、日本人英語学習者がどのような表現を使用しているかを調査しています。日本の英語教育に少しでも貢献できるよう、今後も研究に取り組んでいきたいと思っています。

修了学生からのメッセージ



兵頭 佳央理さん

(2018年度博士前期課程修了)

「英語教育に一石を投じたい」高校生の頃から掲げてきたこの目標を達成するため、大学では英語学を専攻し、理論研究を行っていました。その英語学の知見に基づいて実証研究を行い、知見をさらに深めたいと思い、本大学院への進学を決めました。

大学院では、外国語運用能力の自動化プロセスの解明をテーマに、日本人英語学習者が言語産出する際の統語表象構築の自動化プロセスについて、心理言語学的手法を用いて研究を行いました。

授業やゼミでは、言語学や心理言語学など外国語教育の基礎となる領域について広く学びながら理論的基礎固めを行い、基礎研究の知見について理解を深めることができました。また、本コースでは定期的に集団指導演習が実施されるため、多岐にわたる専門分野の先生方から指導助言をいただくことができ、自身の研究について多角的に考える絶好の機会が多く設けられています。そのため、計画的に研究を遂行することもでき、当該分野に関連する学外の研究会において、研究成果を発表する機会を得られたことも貴重な経験となりました。さらに、得られた知見をもとに、教育者として理論を実践に結びつける好機にも恵まれ、授業実践への応用可能性を探りながら研究を進めることができました。

本コースで学んだ博士課程前期課程の2年間は大変充実した有意義な時間であったと感じています。今後は、本コースでの研究成果を生かし、英語教育に一石を投じ、その波紋を広げるだけでなく、日本における英語教育の発展に貢献できる研究者・教育者になりたいと考えています。



李 瑶さん

(2018年度博士前期課程修了)

英文学科の学部生のとき、アメリカ文学に興味を持ち、特にアメリカ戦争小説に描かれた人々の心理変化について深く学びたいと思い、大学院に進学しよう決めました。更に、より広い視野から研究を進めていきたいと考えたため、第二外国語として日本語を学び、そして日本への留学を決意しました。

外国語教育システム論コースは教育の分野に限らず、心理言語学や文学など幅広く学ぶことができます。本コースに在籍している先生方は多様な分野でご活躍されているため、様々な観点から助言をいただき、より多角的に自分の研究を進めることができました。また、本コースに所属する学生の背景や研究テーマも多様であるため、お互いの交流を通して新しい知見を得られました。何よりも、集団指導演習では、自身の研究の成果をコース内の先生や院生に発表し、様々な分野の方からアドバイスいただけました。集団指導演習は自分の研究を様々な人に聞いてもらう機会であり、他の院生の発表を聞いて学ぶ機会にもなりました。その為、本コースは広い視点を持ちつつ専門性を深めたい方、そして一日も早く日本の学術研究に馴染んでいきたい外国籍の学生に最適のコースだと思います。

卒業後は大学院で鍛えてきた英語と日本語を活用したいと思い、日本で就職することを決めて、グローバルな舞台で活躍していきたいと考えます。本コースで学んだことは、学術的な知識だけではなく、社会人としての適応力、頭の柔軟性、そして逆境にぶつかっても粘り強く乗り越える根性です。本コースで勉強した二年間の経験はきっと将来自分の心の糧となると信じています。

Q&A

外国語教育システム論コースとは、どのようなことを研究するコースでしょうか？

外国語教育システム論とは、外国語教育の基盤となる基礎研究の知見について理解を深め、学際的な立場から新しい時代の外国語教育のあり方を探求しようとするコースです。

外国語教育システム論コースでは、どのようなことが学べるのでしょうか？

このコースでは、外国語教育のシステムを支える、言語学・心理言語学、外国文学、文化学について広く学びながら、外国語教育の研究を行ったり、実践力を身につけることができます。また、英語のみならず、ドイツ語、フランス語、中国語、日本語などの言語を専攻する院生にも対応しています。

中学校・高等学校の英語教員志望ではないのですが、このコースには不向きでしょうか？

このコースは、英語の教員養成のみを目的としたものではありません。たとえば、外国語教育への応用を考えながら、心理言語学や音声学の研究を行ったり、外国語習得を意識しながら、アメリカ文学、フランス文学を専門とするなど、幅広くかつ深く学ぶことができます。

入学後は、コースが開講する授業しか履修できないのでしょうか？

外国語教育システム論コースに所属していても、他コースの授業を履修することが可能です。外国語教育システム論コースに開設されている授業科目を中心に、たとえば、外国語教育コンテンツ論コースが開講する授業科目を履修することができます。

外国語教育コンテンツ論コース



外国語教育コンテンツ論コースでは、新時代の外国語教育の創造に主体的に参画できる人材育成を目指し、外国語教育の内容・方法・展開に関わる研究を総合的に行っています。本コースでは、言語学（コーパス言語学・認知言語学・語用論・音声学）と教育学（授業論・指導法・教育工学）の学問的基盤をふまえて、特に、教育現場での実践的展開を見据えた研究に精力的に取り組んでいます。本コースにおいて、外国語教育を取り巻く諸問題に多面的にアプローチする能力を付けた修了生は、国内外の教育機関等で活躍しています。本コースでは、学部時代の専門にかかわらず、外国語教育を通して社会のグローバル化に貢献しようとする意気込みにあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績（前期課程） 武庫川女子大学附属中学校・高等学校非常勤講師、金沢大学非常勤講師、神戸大学附属中等教育学校教諭、兵庫県立高校教諭(2)、滋賀県立高校教諭、神戸女学院中高等部教諭、沖縄県立高校講師、西大和学園中高講師、尼崎市立中学校教諭、神戸市立中学校教諭、(株)矢崎産業、(株)SONY Computer Entertainment, Taiwan、(株)三菱電機、(株)白鳩(インターネット通販)、(株)日立ソリューション、(株)富士通、他。
（後期課程） 外国人特別研究員(神戸大学)、近畿大学准教授、環太平洋大学教授、大阪大学准教授、広島国際大学専任講師、福井大学助教、関西外国語大学(非)、関西大学(非)、流通科学大学(非)、中南財経政法大学講師、山東科技大学講師、西安理工大学講師、中国四川外国語大学講師、他

在籍学生数（前期課程） 8名 研究科の中でも学生数の多いコースの1つです。助け合い、競い合って学べる環境が用意されています。
（後期課程） 7名

論文テーマ例（前期課程） 英語系:「シャドーイング・リピーティングが日本人英語学習者の音声に与える影響—ピッチ幅・核配置に着目して—」 日本語系:「母音に先行する撥音の弱化について—日本語母語話者の生成と知覚—」「書き言葉コーパス・話し言葉コーパス・母語話者コーパス・非母語話者コーパスの四元分析に基づく日本語基本オノマトへの検討」
（後期課程） 「現代日本語におけるオノマトへの用例解明と中国人日本語学習者のためのオノマトへ指導に対する提言—コーパス言語学の教育的応用の可能性をめぐって—」「中国語非軽声2音節語の音響的特徴」「幼児英語教育における教室会話の分析」

石川 慎一郎 教授 外国語教育内容論特殊講義Ⅱほか

応用言語学の観点から、コーパス（大規模テキストデータベース）を使った英語・日本語の言語分析・教材分析・教材開発・語彙習得などを主として研究しています。あわせて、語彙処理の心理的機制や、小中高大での言語教育のカリキュラム設計、教授法などにも関心を持っています。科学的な視点から言語や教育の問題を考えてみたい学生を歓迎します。

柏木 治美 教授 外国語教育工学論特殊講義ほか

情報通信技術の学習環境への応用に関する研究を行っています。最近、3DCGキャラクタを取り入れ、外国語や日本語で緊張せずに自身の意見や考えを話せるようになることを支援するためのコミュニケーション活動環境について検討しています。新しい技術を取り入れた学習環境の開発研究に興味を持つ学生を歓迎します。

木原 恵美子 准教授 外国語教授学習論特殊講義ほか

認知文法の観点から英語の文法現象の記述を行いながら、文法の学習メカニズムの分析や教授法の開発に関する研究も行っています。特に、「構文」という概念を用いて、英語母語話者や英語学習者が使用する構文を分析することによって、認知文法や構文文法の実用性と限界を検証しています。文法の分析や記述に興味がある学生を歓迎します。

Tim Greer 教授 第二言語運用論特殊講義ほか

言語表現とそれをを用いる人との関係に関心を持っています。会話分析を始めとし、質的調査方法を使用し、第二言語語用論(L2 Pragmatics)を専門にしています。二ヶ国語で行う会話、オーラル英語能力試験での会話、日常会話など様々な場面で「言葉を使った社会的行為」を研究しています。また、言語教育、教材分析、アイデンティティ構成、バイリンガリズム、などの研究も行っています。

朱 春暉 教授 言語対照応用論特殊講義Ⅱほか

言語音声を生理的、物理的、心理的諸側面から研究し、外国語の発音をいかに効率よく教えるかを検討しています。調音的にはMRI動画の分析、音響的には音声のスペクトルやピッチ等の分析をしています。言語音声や外国語の発音・発音指導に興味を持つ学生を歓迎します。

大和 知史 教授 外国語教育内容論特殊講義Ⅰほか

英語教育の中でも、英語発音指導（特にイントネーションなどのプロソディ）を主な研究テーマとし、学習者の英語音声の使用実態の把握、指導への応用などを主に研究しています。また、語用論的能力育成のための指導に関連した理論的背景の精緻化や指導法にも関心があります。

新任教員（2020年10月着任予定）

所属学生からのメッセージ



Amar Cheikhna さん

(博士後期課程 2年)

Title of dissertation: Some Interactional Practices Teachers Use to Pursue a Response from Students in EFL Classrooms

After graduating from University Putra Malaysia with M.A in applied linguistics, I started my career as an English professor in my country. Later I decided to come to Japan in order to develop my research skills and to further my knowledge in the field of applied linguistics.

Currently I am doing my PhD in Conversation Analysis under the supervision of Dr Tim Greer. I am looking into teacher's practices in EFL classrooms in Japanese universities. The focus is on how EFL teachers pursue missing responses from students in EFL classrooms.

The PhD program at Kobe University has enhanced my knowledge of the field, and has also provided a great environment for conducting academic research. Being a member of the doctoral program here at Kobe University has given me a chance to be part of an excellent group of researchers.

Since I joined the program I have participated in many conferences in Japan and overseas. This experience has helped me build a wide network within the field of conversation analysis. It also allows me to share my research findings with other researchers in the field.

In addition to the academic experiences, living in Japan as an international student has provided me with a unique experience and enabled me to understand and enjoy the interesting Japanese culture.



石田 麻衣子さん

(博士前期課程 2年)

甲子園大学人間文化学部心理学臨床心理学コース卒業。研究テーマ：「小学校英語教育のための語彙選定」

私は小学校において外国語(英語)の専科教員として勤務していますが、指導には自身の外国語(英語)教育に関する経験に頼るところが大いいため、子どもにとってどのような語彙を提示することが適切であるのか、またどのような教材開発を行うことがスムーズな小中連携に資するのかなどについて学術的な拠りがない状態が長く続いていました。小学校において教科としての「英語」が導入されることが決まる以前から、英語教育、特に英語の初学者に対する教育の専門性を高める必要があったと感じていました。そのような中、幸いにも本学へ入学する機会をいただくことができました。現在は主に小学校英語教育における語彙選定について研究を進めています。これまで英語において語彙の選定に関わる研究は数多く実施されてきましたが、小学校英語科における語彙研究はまだ始まったばかりと言えます。自身の研究の成果が将来の子ども英語教育に直結する最先端の研究となるのではないかと考えると、研究に広がりがあり、とても有意義に感じられます。

本コースでは、応用言語学の基礎からコーパス言語学、音声学、統計学等、幅広い分野において深く学ぶことができます。また、所属研究室において指導教員から直接指導を受けるゼミでは、自分で進めている研究に対して専門性に富んだ指導を納得がいままで受けることができます。さらに、毎月コースに在籍する学生及び教員が参加する集団指導では、専門の異なる先生方より丁寧な指導を受けることができます。ゼミと集団指導での経験は、学外で開催される研究会や学会での発表、学術誌へ論文を投稿する際等に活かすことができます。本コースは、自分が興味関心の高い分野に関する研究を進める際に専門性の高い指導を受け、その研究の成果を学外に広く発信していきたいと望む方に最適であると言えます。

修了学生からのメッセージ



張 晶鑫さん

(2019年度博士後期課程修了)

中国・武漢大学大学院日本語学研究所博士前期課程を経て、本学国際文化学研究所博士後期課程修了。

研究領域：日本語学・日本語教育学・コーパス言語学。

日本学術振興会より「第10回育志賞」を受賞(2020年2月)。2020年4月より、日本学術振興会外国人特別研究員として神戸大学において研究を継続中。

私は日本語研究者になることを目指し、本コースに入学しました。博士論文では、中国人日本語学習者にとって習得が難しいとされるオノマトベに注目し、多面的コーパス(電子化された言語資料の集集体)を用いた客観的な言語調査を行うことで、(1)どのオノマトベをどこまで教えるべきか、(2)学習者はオノマトベについてどのような問題を抱えているか、(3)その問題を解決するためにオノマトベをどう教えるべきか、という諸点の解明を目指しました。博士論文を完成させることができたのは指導教員をはじめ、

本コースの先生方の支えのおかげです。まず、週1回のゼミでは、指導教員から丁寧かつ熱心な指導をいただきました。コーパス言語学をはじめ、言語研究・日本語学研究の面白さを知ることができ、さらにいただいたアドバイスに基づいて研究が大きく進みました。また、年5回程度の集団指導では、ゼミで報告した内容をよりまとまった形で発表することができ、様々な専門分野の先生方から助言をいただきました。これらの段階的な指導により、研究が確実に捗ることができ、学外での学会発表や論文投稿につなぐことができました。結果として、博士論文の執筆はスムーズに進めることができました。このほか、研究室の雰囲気がよく、異なる国籍を持つ院生同士がお互いに助け合い、お互いに刺激を与えあう環境で楽しく研究生活を送ることができました。今後本コースで学んだことを活かして言語研究生活や教育生活を楽しんでいきたいと思っております。本コースは、外国語教育に関する研究を体系的に深めたい方に最適なコースだと思います。



松本 悠さん

(2019年度博士前期課程修了)

研究テーマ：「シャドーイング・リピーティングが日本人英語学習者の音声に与える影響 ～ピッチ幅・核配置に着目して～」

私は学部生の頃、海外に滞在した経験から「英語」に興味を持ちました。帰国後、自分なりに言語学習法について学んでいましたが、もっと学術的に英語学習法の効果や、日本人英語学習者をとりまく学習環境の実状について理解を深めたいと本コースに入学しました。

大学院では、日本人英語学習者を対象に、シャドーイング・リピーティングという二つの学習法の効果について調査を行いました。先行研究であまり触れられてこなかった、トレーニングの途中経過や、核配置といった観点を加えることで、これまでとは違った視点で二つの学習法への理解を深めることができました。

本コースは、言語教育分野に関する視野を広げ、かつ自身の専門性を高めていきたい方には最適なコースだと思います。コースには、コーパス言語学・音声学・会話分析といった言語教育に関連する、様々な分野に精通した先生方がおられます。自身の研究進捗をコース内の先生や院生に発表する集団指導では、色々な領域から幅広いアドバイスが得られ、自身の研究内容をより深化させることができます。また、他の院生の発表を聞き、刺激を受けることで研究へのモチベーションをお互いに高めあえることも、本コースの大きな特徴です。

私は、このコースで指導を受けたことで、「物事を多角的に捉える力」を身につけることができたと感じています。研究に行き詰った際も、様々な方面から考えを巡らすことで、少しずつ前に進むことができました。就職先でも、ここで身につけた広い視野を活かしながら、頑張りたいと思います。

Q&A

英語以外の外国語教育を学ぶことはできますか？

本コースでは、英語・日本語・中国語・ドイツ語の研究指導も行っており、所属学生にもこれらの諸言語を専攻している方がいます。多言語の視点から外国語教育を考えられるのも本コースの特徴の1つです。

英語教員免許を取得できますか？

学部時代に一種免許状を取得している場合は、博士前期課程で指定された科目の単位を取得することによって専修免許状を取得することができます。また、一種免許状を取得していない場合は、大学院に在籍しながら学部科目を並行履修して、教員免許(一種免許状)取得に必要な科目の単位を取得することが可能です。

学部時代の専門が語学や教育学ではないのですが、本コースで研究していけるでしょうか？

これまで在籍していた院生の学部時代の専門は、言語学・言語教育学のみならず、文学・法学・経済学・理工学などさまざまです。語学力と語学教育への熱意があれば、大学院において新たに外国語教育の研究を始めることも十分に可能です。本コース

では、導入的な講義を体系的に開講しているため、これらの履修により、2年間で修士レベルの知識や分析スキルを身につけ、さらに、博士課程で研究を深めることができます。

留学経験者は多いのでしょうか？

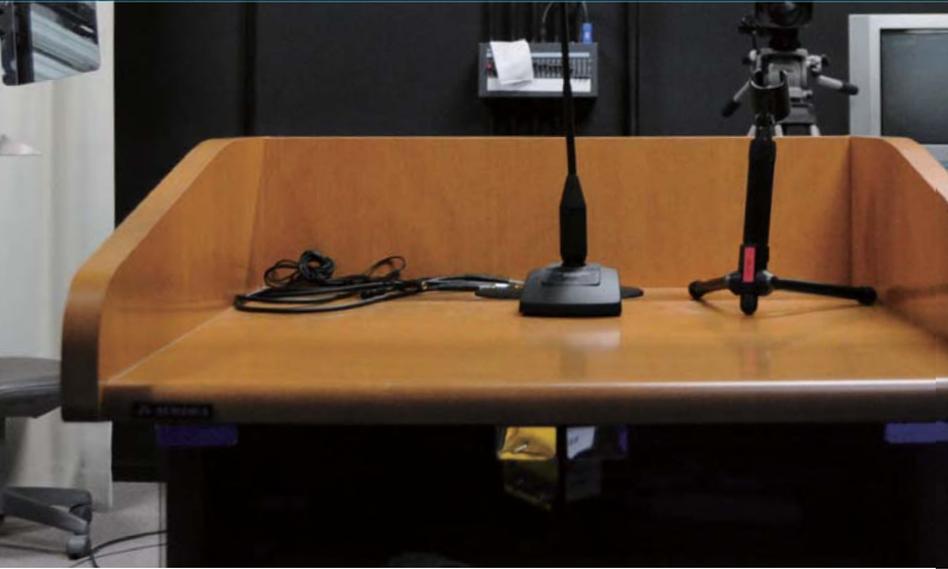
在籍中に、米国、ドイツ、豪州などで留学を経験した学生も多くいます。また、韓国で実地調査を行った学生もいました。院生が留学しても、指導教員はメールなどで頻りに連絡をとり、きめ細やかな指導とサポートを提供しています。在籍中には留学生も多く(中国、米国、モーリタニア等)、国際色豊かなコースです。

修了後の進路状況はどうですか？

教育職への就職が非常に多くなっています。前期課程修了者は、全国の公私立の高校・中学校の英語教諭として活躍しており、後期課程修了者は国公立大学や海外の大学の教員に就職しています。この他にも、民間企業の海外部門で活躍する修了生もいます。また、高校や大学で教員として勤務しながら本コースで研究活動に取り組んでいる学生もいます。

連携講座（博士後期課程に設置）

先端コミュニケーション論コース



ますます増大する文化摩擦問題や、近い将来われわれが直面することになるであろうロボットとの共存問題は、コミュニケーションの問題に他なりません。人間のコミュニケーションとはどういうもので、そこにどのような文化差があるのか。言語・パラ言語・非言語行動そして身体は、コミュニケーションの中でそれぞれどのような役割を果たすのか。それはわれわれの外国語学習にどのように活かせるか。先端コミュニケーション論コースは、最新の技術や機器などを駆使してこのような問題を解明し、新しいコミュニケーションの可能性を切り開こうとするコースです。

連携先：株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）



進路実績 甲南大学教授、産業技術総合研究所、国際電気通信基礎技術研究所、PD研究員他

在籍学生数（後期課程）2名

- 論文テーマ例**
- 外国語学習における知覚訓練と語彙訓練の順序効果
 - 英語音声の韻律知覚に及ぼす諸要因の研究
 - 外国語音声学習における音響的・意味的文脈効果の研究

所属教員の紹介

内海 章 客員教授 先端コミュニケーション論特別演習
画像認識・視線検出・マンマシンインタフェースなどの分野を主として研究しています。

山田 玲子 客員教授 先端コミュニケーション論特別演習
第二言語の音声知覚、音声言語学習、eラーニングなどの分野を主として研究しています。

住岡 英信 客員准教授 先端コミュニケーション論特別演習
人とロボットのコミュニケーションの分野を主として研究しています。

日本語教師養成サブコース

SUB-COURSE ON TEACHING THE JAPANESE LANGUAGE

現在、日本には日本語教師を認定する公的機関や資格試験はなく、日本語教育能力試験（財団法人日本国際教育支援協会主催）に合格していることや、大学等の日本語教師養成講座を修了していることが、日本語教師としての専門的な知識・技術を持っていることの証明となります。

本研究科では、文化庁報告『日本語教育のための教員養成について』（平成12年）にある内容を含む多くの授業が提供されており、これまでも多くの修了生が、本研究科在学中に受講した日本語教育関連科目の知識を生かして、国内外の機関で日本語教育に従事しています。

2015年度に、博士前期課程の学生が各自の専門の勉強をしながら、日本語教師になるために必要とされる科目も受講できる「日本語教師養成サブコース」が新設されました。所定の単位を取得した場合には、国際文化学研究所の発行する修了書が授与されます。2016年度からは、博士後期課程の学生もサブコースを履修することが可能になりました。2018年度からは、平成30年に出された文化庁の教員養成に関する報告書にもとづき、教育実習科目を新たに設け、より実践的な教育を行なっています。



名前 甲藤 瞳さん
所属コース 言語コミュニケーションコース

サブコース履修者には、日本語教師を目指している人はもちろん、将来の選択肢として関心を持っている人などもあります。私は日本語教師になることを志望していたため、履修を決めました。日本語教育について学び始めたばかりだったので、ついていけるか不安でしたが、授業は少人数体制でインタラクティブなものが多く、先生方の熱心なご指導のもと、少しずつ知識を増やしていくことができました。また、サブコースでは理論だけではなく模擬授業で実践的な練習をする機会もあります。私は、その他にも学内プログラムを利用してドイツの大学やミャンマーの日本語学校で短期のインターンシップに参加し、授業見学やアシスタント活動を通して実際の現場を体験しました。

日本語教師の資格の一つに日本語教育能力検定試験がありますが、サブコースの授業と並行して自主学習による対策で合格することができました。現在は、JICA海外協力隊として、ラオスの地方国立大学に新設された日本語学科で活動しています。サブコースでの経験を生かしながら、日本語コースの土台作りに励んでいます。